



# 名大トピックス

No.142 平成17年3月31日発行 名古屋大学総務企画部総務広報課 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016  
http://www.nagoya-u.ac.jp

## 個別学力検査が実施される



### 特集

平成16年度 定年退職教授のことば(24~51頁)

### CONTENTS

・個別学力検査が実施される.....	2	・年代測定総合研究センターが第17回タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催.....	15
<b>[全学ニュース]</b>		・大学文書資料室の看板上掲式・男女共同参画室の移転披露式が挙行される.....	16
・第3回経営協議会及び第2回総長選考会議が開催される.....	4	・八高会から大学文書資料室に寄附金が贈呈される.....	17
・高等研究院平成17年度新規採択プロジェクトが決定.....	5	<b>[研究ナウ]</b>	
・IB電子情報館と野依記念物質科学研究館などが愛知まちなみ建築賞をダブル受賞.....	6	・東アジア共同体への経済・開発 이슈ー	
・管理職研修会が開催される.....	7	江崎 光男.....	18
・第1回教育記者会懇談会が開催される.....	8	・タンパク質の一生と細胞が働く仕組み	
・平成16年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べを開催.....	9	遠藤斗志也.....	20
<b>[部局ニュース]</b>		<b>[若手研究者の紹介]</b>	
・中高年者のための人生・キャリア再設計セミナーが開催される.....	10	・臨界現象における超スケーリングの発見について	
・経済学部・大学院経済学研究科の建物改修が終了.....	11	渡辺 宙志.....	22
・エコトピア科学研究機構が中国科学院過程工程研究所と学術交流協定を締結.....	11	<b>[特集]</b>	
・1999年ノーベル物理学賞受賞 Gerard't Hooft 教授講演会が開催される.....	12	・平成16年度 定年退職教授のことば .....	24
・文部科学省科学技術振興調整費により組込みソフトウェア技術者人材養成プログラムが始まる.....	13	<b>[イベントカレンダー]</b> .....	52
・農学国際教育協力研究センターが2004年度第9・10回オープンセミナーを開催.....	14	<b>[本学関係の新聞記事掲載一覧]</b> 平成17年2月分 .....	54



## 個別学力検査が実施される

- 志望学部目指して 平成17年度入学者選抜 -

本学の個別学力検査（前期日程）が、2月25日（金）東山地区及び大幸地区で行われました。

当日は、晴天に恵まれ、豊田講堂テラスやグリーンベルト周辺では、受験生が早くから集まり、引率教師からの試験前の注意事項に耳を傾け、本番に備えていました。また、キャンパスのあちこちで、受験票を片手に緊張した面持ちで来学した受験生に対し、職



携帯電話で合格発表掲示板を撮影する受験生ら



試験会場へ向かう受験生

員や学生が親切に案内する姿も見られました。

午前9時から1時間目の外国語の試験が9学部で一斉に始まり、1454人の募集人員に対し、4013人が試験に臨みました。各学部の試験は、5時30分にすべて終了し、受験生は、仲間同士で試験問題について話し合ったりしながら、それぞれ家路に着きました。

また、後期日程による試験が3月12日（土）に実施され、前期日程の合格発表が3月8日（火）、後期日程の合格発表が3月22日（火）に豊田講堂前庭で行われました。



試験会場を確認する受験生



体育会の学生に胴上げされる合格者

## 平成17年度名古屋大学入学試験受験状況

《前期日程》				《後期日程》				
学部・学科・専攻名		募集人員	志願者数	合格者数	募集人員	志願者数	合格者数	
文 学 部		100	321	112	25	190	31	
教 育 学 部		53	140	58	12	101	12	
法 学 部		85	222	89	20	254	28	
経 済 学 部		130	358	151	35	263	45	
情報文化学部	自 然 情 報 学 科	22	82	33	10	81	11	
	社会システム情報学科	23	143	33	10	158	13	
	小 計	45	225	66	20	239	24	
理 学 部		195	515	206	25	267	36	
医 学 部	医 学 科		75	438	79	10	169	11
	保 健 学 科	看 護 学 専 攻	52	134	59	8	49	11
		放射線技術科学専攻	23	84	28	7	40	9
		検査技術科学専攻	20	76	24	8	43	8
		理学療法学専攻	12	46	13	2	35	2
		作業療法学専攻	11	27	12	4	16	4
		計	118	367	136	29	183	34
	小 計		193	805	215	39	352	45
工 学 部	化学・生物工学科		105	224	110	30	203	34
	物 理 工 学 科		133	237	141	38	211	46
	電気電子・情報工学科		119	296	129	34	246	40
	機 械 ・ 航 空 工 学 科		112	341	118	32	263	39
	社会環境工学科		49	141	59	14	102	19
	小 計		518	1,239	557	148	1,025	178
農学部	資源生物環境学科		56	185	63	7	27	7
	応 用 生 物 科 学 科		79	250	93	11	51	11
	小 計		135	435	156	18	78	18
合 計		1,454	4,260	1,610	342	2,769	417	

## 第3回経営協議会及び 第2回総長選考会議が開催される

第3回経営協議会及び第2回総長選考会議が、2月5日(土)、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

総長選考会議では、初めに、総長選考会議の学内委員で組織された総長選考会議ワーキンググループの検討経過が報告された後、同ワーキンググループにおいて作成された「国立大学法人名古屋大学総長選考規程(案)」及び「国立大学法人名古屋大学総長解任規程(案)」について審議され、活発な意見交換が行われました。

これらの規程(案)については、今回の意見を踏まえて同ワーキンググループで引き続き検討し、次回の総長選

考会議でさらに審議することとなりました。

続いて開催された経営協議会では、初めに、「名古屋大学運営の基本姿勢」について、平野総長から説明があり、了承されました。

次いで、平成17年度政府予算(案)、平成16年度中間決算、職員給与規程の一部改正等について、担当理事から説明が行われ、審議の結果、了承されました。委員からは大所高所からの貴重なご意見が多数寄せられました。

また、本学の社会連携(産学官連携)の取組状況について、担当理事から資料をもとに説明が行われました。





# 高等研究院平成17年度新規採択プロジェクトが決定

高等研究院平成17年度新規採択プロジェクトが、2月15日（火）教育研究評議会で公表されました。

高等研究院は、本学を代表する研究者を擁し、世界の最高水準の学術研究を目指す研究専念組織として、平成14年4月に創設されました。同院は、本学が将来の知的資産としての価値を認めた独創性の高い学術研究を、文系・理系分野を問わず集中的に推進し、その

成果を全学的な研究活動の活性化に生かすとともに、広く社会に還元することを目的にしています。

これまで平成14年度の第1回研究プロジェクト公募で15件、平成15年度の第2回公募で13件、平成16年度の第3回公募で11件のプロジェクトが採択されています。

高等研究院平成17年度新規採択プロジェクト一覧

研究タイプ	研究プロジェクト名	研究代表者			期間
		所属	職名	氏名	
	細菌環境応答系におけるタンパク質の細胞内局在と相互作用のダイナミクス	大学院理学研究科	助教授	川岸 郁朗	H17.4.1 ~ H20.3.31
	中枢神経の損傷後再構築の分子基盤	大学院医学系研究科	教授	門松 健治	H17.4.1 ~ H20.3.31
	20世紀日本の生活様式と社会環境に関する学際的研究	大学院経済学研究科	教授	中西 聡	H17.4.1 ~ H21.3.31
	東アジアにおける国際協調的歴史教育システムの構築に関する政治教育学的研究	大学院教育発達科学研究科	助教授	近藤 孝弘	H17.4.1 ~ H20.3.31
	内生的な比較優位の理論に基づく国際分業と国際間要素移動の理論的研究	大学院経済学研究科	教授	多和田 眞	H17.4.1 ~ H20.3.31

\* 研究タイプ（萌芽的研究）

従来の研究分野の枠を越えた新しい分野を創出することをめざす研究

研究タイプ（知の体系化・総合化を目指す研究）

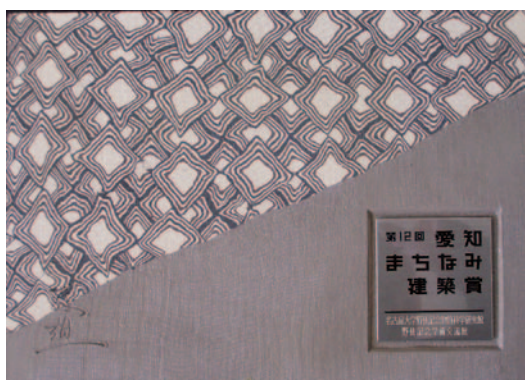
分散する知識や成果を体系化・総合化することにより、飛躍的に価値ある知的フレームワークの創造・展開が期待される研究

研究タイプ（戦略的プロジェクト研究）

人類の直面する諸課題を解決するために今後どのような学術分野、技術大系、社会体系が構築されるべきかを模索する研究、また、その実現のためにはどのような研究の枠組み・体制や諸方策が必要となるかを模索する研究



## IB 電子情報館と野依記念物質科学研究館などが 愛知まちなみ建築賞をダブル受賞



銘板

第12回愛知まちなみ建築賞が発表され、「名古屋大学 IB 電子情報館・地下鉄名古屋大学駅」及び「名古屋大学野依記念物質科学研究館・学术交流館」が、併せて受賞する快挙を遂げました。

この賞は、愛知県が主催し、良好なまちなみ景観の形成や、潤いのあるまちづくりに寄与するなど、良好な地域環境の形成に貢献していると認められる建築物又はまちなみを表彰するもので、平成5年度に創設されました。

表彰式は、2月1日(火)、愛知県芸術文化センターで行われ、本学の2件を含む7つの施設が表彰されました。

審査講評では、IB 電子情報館・地下鉄名古屋大学駅については、「都市に対する景観づくりにあまり積極的ではなかった旧国立大学が、地域を意識したマスタープランを作り、地下鉄の開設を契機に基礎自治体との協働を図ることによって、都市デザインに対する大きな進歩を遂げた点」が評価されました。また、野依記念物質科学研究館・学术交流館については、「公募型プロポーザル方式により選定された設計者により、単

体としての建物の秀逸さばかりではなく、建物と建物の間の空間を見違えるようにデザインした点」が評価されました。

表彰式に引き続いて行われた作品発表会では、IB 電子情報館などについては、設計者を代表して、工学部施設整備推進室の恒川和久講師が発表を行い、地下鉄駅のデザインとキャンパスマスタープランの関係や、グリーンベルトの緑と連続するランドスケープ、地域と大学の交流拠点としての公共空間の提供、多数の関係者による地域に開かれた計画プロセスといった計画コンセプトを紹介しました。また、野依記念物質科学研究館などについては、プロポーザルで選定された設計者である飯田善彦氏が発表を行い、2つの施設のプログラムのユニークさや、部分と風景としての二つの建物の関係、それぞれの建物のデザインの考え方やランドスケープなどについて紹介しました。

なお、これらの建物については、キャンパスクローズアップ1・2・3（名大トピックス NO.132・133・135）で詳しく紹介されています。



野依記念物質科学研究館（撮影：阿野太一）



## 管理職研修会が開催される

管理職研修会が、2月3日(木)、豊田講堂第一会議室において開催されました。

この研修会は、「管理職の意識改革」の一環として、部課長、事務長等の管理職を対象に開催されたもので、各部局から50名以上の参加がありました。

初めに、人事・労務関係担当の森理事から開会のあいさつがあり、今回の研修の趣旨や開催に至った経緯について話がありました。また、日本ガイシ株式会社人事部労政担当部長・勤労厚生グループ マネージャーの犬塚敏彦氏を講師に招いて、「管理職の役割について」と題する講演が行われ、労務管理を考える上での「心」への働きかけの重要性や管理行動の具体例、権限を行使する際の留意点など管理者としての責務について話がありました。最後に、犬塚氏は、「仕事は増加、人手不足、予算不足、減らない残業...悩みは尽きないが、労務管理をやらない理由にはしてはいけません。」と述べ、講演を締め括りました。

法人となって1年が過ぎようとしています。労働基準法の下での管理職の意識改革が非常に重要であることを改めて実感させられる意義のある研修会となりました。



IB 電子情報館 (撮影：車田保)



地下鉄名古屋大学駅 (撮影：車田保)



野依記念学術交流館 (撮影：阿野太一)



講演する犬塚氏



## 第1回教育記者会懇談会が開催される

第1回教育記者会懇談会が、2月22日(火)、本部第2会議室において開催されました。

本学では、これまでも名古屋教育記者会の会員各社から総務広報課を窓口に適宜取材等を受けるとともに、場合によっては、合同の記者会見等を実施し、社会に様々な情報を適宜発信してきました。法人化後、各大学は競争的環境に置かれ、社会から個性や特色を發揮していくことが求められるとともに、社会に対して、大学の活動を理解してもらえるように、情報を提供していくことが不可欠となっています。

こうした状況を踏まえ、社会に対する情報発信の窓口である名古屋教育記者会会員各社と、より一層緊密な関係を構築するとともに、タイムリーな情報発信を全国に向けて展開していくため、総長及び関係理事と

マスコミ関係各社との定例の懇談の場として、「教育記者会懇談会」を開催することにしました。

この懇談会は、原則として、月1回、部局長会・教育研究評議会の翌週の火曜日の午後に開催し、平野総長と広報担当の山下理事が、教育研究評議会等を経て役員会で決定した諸事項等、今後(翌月)の本学の行事予定、大学として情報発信していくべきトピックス等について説明し、記者と質疑応答を行います。

第1回の懇談会では、役員会で決定した名古屋大学フェロー、個人情報保護規程の制定及びエコトピア科学研究所について、また、トピックスとして、全学同窓会大学支援事業等について、平野総長、山下理事と参加した8社の記者との懇談が行われました。



教育記者会懇談会の様子





## 平成16年度名古屋大学 卒業・修了留学生を送る夕べを開催

平成16年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べが、2月21日(月)、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この夕べは、今春卒業・修了(31か国、約400名)して、本学を巣立っていく留学生の今後の活躍を激励、祝福するとともに、相互理解と交流を深め、本学での思い出の一つとなるよう開催されたものです。当日は、留学生、愛知県をはじめとする留学生支援団体、各部署長、指導教員、留学生関係職員など約260名の参加がありました。

最初に、平野総長から激励、祝福のあいさつがあった後、名古屋大学留学生後援会からの記念品が、総長から各学部の代表者へ手渡されました。また、来賓を

代表して、石田幸男愛知留学生会後援会会長から祝福のあいさつがあり、これを受け、卒業・修了留学生を代表して、工学部4年の洪 有美さん(中国)、大学院国際開発研究科修士課程2年の格日才旦さん(中国)、鄭 芝淑さん(韓国)が、日本に留学してからの感想を含めた謝辞を述べました。続いて、若尾副総長の発声により乾杯が行われた後、留学生が総長や指導教員を囲んで、にこやかに記念撮影したり、歓談する姿が会場のおちろこちらで見られました。夕べは、末松留学生センター長の閉会のあいさつの後、留学生に留学生後援会及び留学生支援団体から記念品等が手渡され、閉会しました。





## 中高年者のための 人生・キャリア再設計セミナーが開催される

大学院教育発達科学研究科は、2月3日(木)から9日(水)までの土・日曜日を除く5日間、「中高年者のための人生・キャリア再設計セミナー」を開催しました。

このセミナーは、同研究科として、近年注目されている中高年者の高失業問題や「2007年問題」(「団塊の世代」の一斉退職)に役割を果たす必要があるのではないかと、また、一般学生・若者の教育だけでなく、成人や中高年者の教育にも関心を向ける必要があるのではないかと問題意識から開催されたもので、人材会社やハローワークが行っている「就職のお世話」的再就職の技術教育ではなく、中高年者が再就職やキャリア・人生の再設計を行うにあたって、じっくりと世の中と自分自身を理論的、客観的に捉える手助けをし、参加者が次の行動を起こすところまで支援することを目的としています。

参加希望者は、新聞に取り上げられたこともあり、定員の50名にのぼり、特に、60歳以上の参加者が3分の1を占め、その中には、うつ病の方やその経験者も数名いました。参加目的は、「定年後の過ごし方のヒントを得たい」が最も多く(10名)、次いで、「人生の見直し・自分探しと生き甲斐を考えたい」(9名)、「人生の指針・方向性を見いだす機会にしたい」(8名)



セミナーの様子

と続けました。

セミナーは、下記の内容で行われ、最終日には、35名が参加して修了式(修了者は39名)も行われました。

1日目：中高年者のこころとからだ

「中高年者のメンタルヘルス：不眠とうつ病について」  
(尾崎紀夫医学系研究科教授・附属病院精神科長)  
「若々しく生きるために」(島岡清総合保健体育科学センター教授・同センター長)

2日目：中高年者の生き方とキャリア開発

「中高年者の生き方」(牧野篤教育発達科学研究科助教授)  
「中高年者の労働事情とキャリア開発」(寺田盛紀教育発達科学研究科教授)

3日目：再出発の経験と心構え

「再出発経験者の生き方体験談」(コーディネーター・伊藤彰茂愛知みずほ大学講師、教育発達科学研究科社会人院生他3名)

「目標実現への心構え」(牧野正人民間企業人事部長・本学経済学研究科修士課程修了)

4日目：人生再設計(キャリア開発)の進め方1

「目標の設定」(山田徳男人材コンサルタント・教育学部OB)

5日目：人生再設計(キャリア開発)の進め方2

「実行計画の立案」(同上)  
「修了式」

セミナー後に同セミナーが参加者の今後の生き方についてアンケートを取ったところ、「再度大学での勉強にチャレンジし、資格取得やこれからの生き方の参考になった」、「自分自身の能力と、人間としての魅力を磨いていく必要があることがわかった」などの回答が寄せられ、また、本学に対して「名大は敷居が高いばかりと思っていたけれど考えが変わった」、「このような事業を続けてほしい」という意見も多数寄せられました。



## 経済学部・大学院経済学研究科 の建物改修が終了

経済学部・大学院経済学研究科の建物改修が1月に終了しました。

この建物は、老朽化への対応・耐震性能の向上や全学共用教育研究施設の確保などを目的として、昨年5月より改修工事を行ってきました。1月に改修工事が終了し、1月末には共同教育研究施設からの引っ越しもほぼ終了しました。

建物は、外装、内装とも一新され、内部は最近の情報化時代を反映して、AV設備も一段と充実し、特に、カンファレンスホール(旧第一講義室)のAV設備は、東海地区最高の機能を有しています。

また、2月2日(水)には、平野総長をはじめ理事、監事等による建物の視察が行われました。



カンファレンスホールで説明を聞く平野総長



経済学部・大学院経済学研究科建物



エコトピア科学研究機構

## 中国科学院過程工程研究所と 学術交流協定を締結

エコトピア科学研究機構は、2月21日(月)、松井機構長とYunfa Chen 中国科学院過程工程研究所副所長が学術交流協定書に署名し、同協定を締結しました。

過程工程研究所は、中国科学院の化工冶金研究所として1958年10月1日に設置された後、2001年4月7日に現在の名称に変更され、290名の研究員を擁し、金属冶金・化学工学分野からバイオ工学までを含む幅広い研究活動を行っています。また、過去30年間で34か国から約600名の訪問研究者を迎え、15か国へ500名の研究者を派遣するなど、国際的な研究所として活発な活動を展開しています。

同研究機構は、過程工程研究所との間で、機構に再編・統合された旧センター時代を含めて、ナノマテリアル、エネルギー科学、環境システム・リサイクル分野における共同研究をはじめとした相互の研究者の交流を活発に行ってきただけでなく、外国人客員教授として多くの教授を同研究所から迎えてきました。また、平成16年10月に開催されたエコトピア科学研究機構設立記念国際シンポジウムにおいて、同研究所の所長で、中国科学院副院長でもあるJinghai Li教授が招待講演を行ったのを機に、広い分野での相互交流が望ましいと両者間の合意がなされ、今回の締結に至ったものです。

今回の学術交流協定の締結により、研究者の交流、学術資料・情報の交換、研究集会の共同開催などを通して、環境調和型持続可能社会の構築に向けて、学術交流がさらに拡充され、両国における研究の発展につながる事が期待されています。



学術交流協定を締結する松井機構長(前列中央左)とYunfa Chen 副所長(前列中央右)及び副機構長・部門長等



## 1999年ノーベル物理学賞受賞 Gerard 't Hooft 教授講演会が開催される

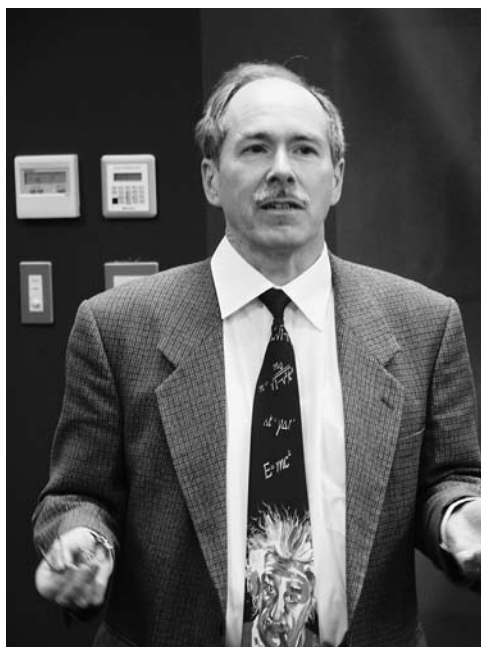
1999年のノーベル物理学賞受賞者ゲラルド ト・フーフト (Gerard 't Hooft) 教授 (オランダ・ユトレヒト大学) の「The Universe inside the Atom」と題する一般向け講演会 (英語) が、2月7日(月)、野依記念学術交流館において、本学の教員・大学院学生ほか約120名が参加して行われました。

't Hooft 教授のノーベル賞受賞理由は、「素粒子の電弱相互作用の量子論的構造の解明」ですが、't Hooft 教授の業績はこれにとどまらず、自然界の3つの基本的な力に関する素粒子論の標準模型全体の量子論的基礎の構築をはじめとして、素粒子論のあらゆる分野の根幹を支えており、まさに現代素粒子論の最高峰と呼ぶにふさわしい方です。今回の講演会は、2月6日 -

8日に本学理学研究科物理学教室素粒子論研究室を訪問されたのを機会に実施されたものです。

講演で、't Hooft 教授は、宇宙の誕生から説き起こし、原子の世界の法則から湯川理論を経て、教授自らがその量子論的基礎を与えた標準模型の解説に至り、未発見のヒッグスポソンの役割の解説とその実験的探索のために2007年から始まる超大型加速器 LHC での実験計画について解説しました。さらに、その先の未解明の基本的力である重力の量子論とそれを含む統一理論の最先端の試みについて、教授独自の深い洞察に基づき語りました。この講演に使用された大変手の込んだアニメーションは、教授自らが作成したとのことで、深遠な理論展開で知られる教授の研究とはまた違った教授の人柄の一端が伺われました。

講演会終了後には、教授を囲んでの懇親会が、野依記念学術交流館1階で、約30名が参加して行なわれ、大学院学生など若手研究者には非常によい刺激になりました。



講演する Gerard 't Hooft 教授



## 文部科学省科学技術振興調整費により 組込みソフトウェア技術者人材養成プログラムが始まる

平成16年度の文部科学省科学技術振興調整費に、本学の「組込みソフトウェア人材養成プログラム NEXCESS (ネクセス)」(代表：阿草清滋情報科学研究科長・教授)が採択され、同プロジェクトがスタートしました。

ソフトウェアは、Web やビジネス系だけでなく、携帯電話・デジタル家電・自動車など身近な多くの製品の中で動作しており、これらを、「組込みソフトウェア」と言います。産業界では、現在、組込みソフトウェアを開発する技術者が全国的に不足しており、特に、物づくり産業の中心である中部圏でその傾向は顕著なものとなっています。

NEXCESS は、組込みソフトウェア技術者の人材養成を目指し、情報連携基盤センターが大学院情報科学研究科の協力を得て推進します。企業文化という言葉で片付けられる極度な現場主義を排除し、将来につながり、世界の標準に足り得る組込みソフトウェア開発

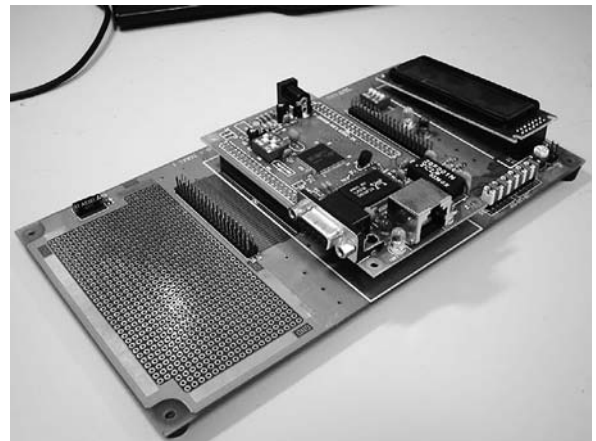
方法論を打ち立て、教育を実践します。技術者のスキルレベルに合わせて、初級から指導者養成まで合計9つのコースを用意し、各コース4日間前後の短期教育が行われます。

コースは、平成16年11月から順次開講しており、今年度中に延べ220名の社会人が受講する予定となっています。また、NEXCESS は、平成20年度までの5年間活動する予定で、1000名を超える社会人教育を行うことになり、これは、日本でも初めてと言える大規模な組込みソフトウェアの社会人向け教育となります。

構築したカリキュラムは、学部・大学院の教育へ適用することも計画されており、また、教育を通じた企業との交流により、産学官連携が教育面だけではなく研究面でも進むことが期待されています。詳しくは、Web ページ(<http://www.nexcess.itc.nagoya-u.ac.jp/>)をご覧ください。



グループ演習中の社会人受講生



組込みソフトウェアを動作させるボード例



## 農学国際教育協力研究センターが 2004年度第9・10回オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、2月17日（木）、「これまでの研究、国際協力活動と今後の抱負」をテーマに、第9回オープンセミナーを開催しました。

講師は、現在、(独)国際農林水産業研究センター（JIRCAS）沖縄支所長で、平成17年4月から新しく同センターの教授として赴任する予定の浅沼修一氏で、ポストドクとしてナイジェリアのイバダンにある国際熱帯農業研究所（IITA）で行ったダイズとカウピーの根粒菌に関する研究、帰国後に九州東海大学農学部、農林水産省北海道農業試験場、九州農業試験場で行った根粒菌に関する研究が紹介されました。続いて、JIRCAS で関わったインドネシアにおける「地域農業システム」、西アフリカにおける「砂漠化防止研究」などの国際共同・協力研究について話された後、JICA や大学院生命農学研究科の教員を交え、現地で有効な窒素固定菌の必要性が熱心に討議されました。

また、2月21日（月）、「農学分野における大学と円借款の連携」をテーマに、第10回オープンセミナーが開催されました。

講師は、国際協力銀行（JBIC）開発部次長兼開発事業評価室長で、平成16年度同センター客員教授である松澤猛男氏で、一年間の研究成果について発表しました。松澤氏は、円借款における農業分野の支援が貧困削減や住民参加といった幅広いものになってきており、日本の厳しい財政事情を踏まえ、その戦略性が高まっていること、世界の中で日本の農学分野が有する比較優位を活かし、大学と円借款の戦略的連携スキームを構築することの重要性について話し、具体的なスキームを提案しました。これを基に、予定の30分を超えて、活発な議論がなされ、来年度に実現化できるように、JBIC と ICCAE が連携して取り組むことが確認されました。



講演する浅沼氏



講演する松澤氏



## 年代測定総合研究センターが 第17回タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催

年代測定総合研究センターは、1月24日(月)、25日(火)、シンポジオンホールにおいて、名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、タンデトロン加速器質量分析計による研究成果を報告するために、毎年1回開催されているもので、17回目となる今回は、研究者、学生、一般市民など87名の参加のもと、3件の特別講演と16件の一般講演が行われました。

1日目の午前中は、鈴木センター長のあいさつの後、タンデトロンの諸性能と現状、蝦夷錦の年代測定に関する講演があり、続いて、宮治 昭文学研究科教授が、アフガニスタン・バーミヤン遺跡の仏教壁画の年代について特別講演を行いました。午後からは、古川記念館1階において、炭素14年代の測定装置であるタンデトロン加速器質量分析計2号機の見学会が行われた後、炭素14年代測定法を放射線物理学・土壌学・地球科学などの分野に応用した研究に関する9件の一般講演が

行われました。

2日目の午前中には、谷口康浩國學院大学講師が、極東地域における土器の出現年代とその用途について、また、西秋良宏東京大学博物館助教授が、中東考古学と年代学、特に炭素14年代測定法がメソポタミアの考古学に果たした役割について特別講演を行いました。午後からは、考古学・古環境学・法医学の分野に、タンデトロン加速器質量分析計による炭素14年代測定を応用した研究に関する5件の一般講演が行われました。

このシンポジウムには、毎年、自然科学はもとより人文科学に至る幅広い分野の研究者や一般市民の参加があり、タンデトロン加速器質量分析計による炭素14年代測定法が、多くの研究分野において重要な役割を果たしていること、また、同センターの研究成果が一般市民の興味をひいていることを伺わせました。

なお、このシンポジウムで発表された研究成果は、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書第16号(平成17年3月刊行)に掲載されます。



熱心に講演を聞く参加者



西秋東京大学博物館助教授による特別講演



## 大学文書資料室の看板上掲式・ 男女共同参画室の移転披露式が挙行される

大学文書資料室の看板上掲式・男女共同参画室の移転披露式が、2月3日(木)本部別館(旧文部科学省名古屋工事事務所)において、平野総長、山下、中島、森、若尾、渡橋の各理事、加藤大学文書資料室長、金井男女共同参画室長の出席のもと挙行されました。

大学文書資料室は、本学の歴史に係る資料の調査・収集を行う学内施設として平成8年に設置された大学史資料室を昨年4月に改組したもので、従来の歴史資料館としての機能に加えて、公文書館としての機能を併せ持つ施設となりました。

また、男女共同参画室は、本学における男女共同参画を積極的に具現化するため、全国の国立大学に先駆けて平成15年1月に設置されたもので、これまでの2年間に精力的な活動を展開してきました。

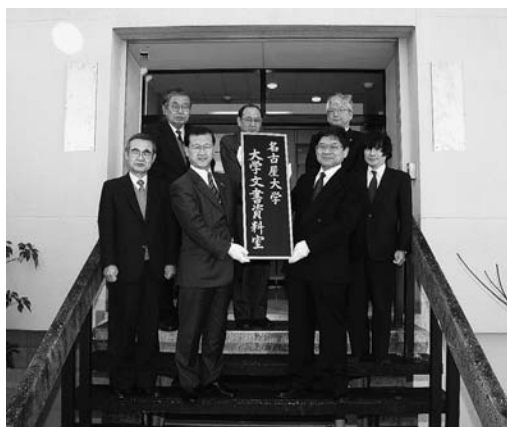
平野総長は、冒頭のあいさつで、大学文書資料室が本部別館に移転されたことは、文書管理の実務支援と教育・研究の機能を有する将来の「大学文書館構想」に向けた第一歩であり、加藤室長をはじめ関係者は、この目的達成に向けて、今後とも努力願いたいと激励しました。また、男女共同参画室の2年間の活動に触れ、男女共同参画社会推進シンポジウムの開催、あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラムの創設、学部学生向け授業の開



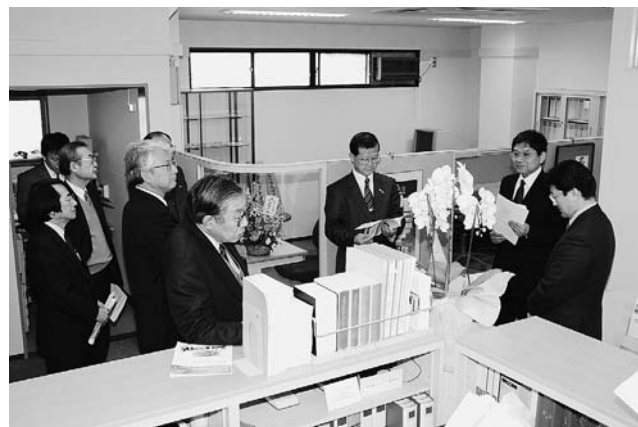
男女共同参画室の看板を掲げての記念撮影

講、大学内保育所施設設置に向けての提案など、本学における男女共同参画の推進に大きく貢献してきたことが紹介され、今後の両室の活躍と発展を祈念したいと述べました。

また、看板上掲式・移転披露式の終了後には、改修工事によりリニューアルした本部別館の施設見学が行われました。本部別館は、資料の搬入・バリアフリーに対応したスロープの設置、地階部分の書庫の増設、厳重なセキュリティーの導入など充実した施設となっています。



大学文書資料室の看板を掲げての記念撮影

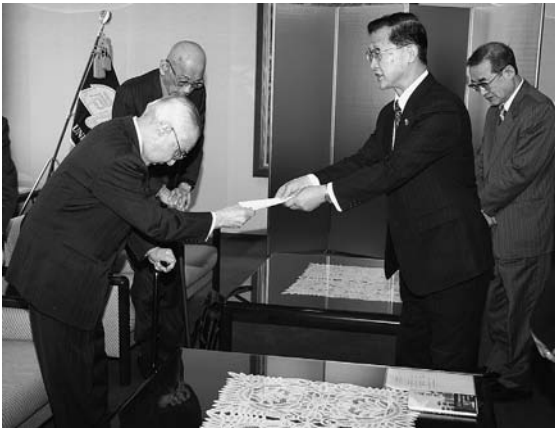


施設見学の様子





## 八高会から大学文書資料室に寄附金が贈呈される



平野総長に目録を手渡す山田八高会会長

旧制第八高等学校（旧教養部の前身）の同窓会である「八高会」から、大学文書資料室に対し、活動助成のために寄附金の申し出があり、2月10日（木）、山田 隼一八高会会長（本学名誉教授）、青木幸一郎理事長（岐阜大学名誉教授）のほか常任理事3名が本学を訪れ、平野総長に寄附目録を贈呈しました。

平野総長は、山田会長から手渡された目録を手に、「温故知新。過去の重要な記録を知ることは、将来の学術研究の発展のために不可欠なもの。寄贈された貴重な資料を大切に保存し、大学のアーカイブスを進めていきたい。大先輩からのご厚意を大切に使用させていただきます。」と抱負と感謝の意を述べました。

同室では、これまでに八高会から寄贈された機関誌「やつる

ぎ」や「瑞陵」等の貴重な資料を永久的に保存する計画を進めており、今回の寄附金はこれらの機関誌などのCD-ROM化の費用に充てられています。

八高及び八高会関連の資料のほとんどは、名古屋市博物館や長野県松本市の旧制高等学校記念館に寄贈されており、その他は、八高会会員らによって手分けして保管されています。八高会では、会員の高齢化が進む中、3年後の平成20年の創立100年祭を活動の一つの区切りとして、収集された関連資料の同室への寄贈を検討しています。同室では、八高会の御厚意に応えるため、関連書籍や資料等の永久保存を行うとともに、八高及び八高会のゆかりの品々を集めた「八高コーナー」の設置を計画しています。

なお、贈呈式終了後には、本部別館へ移転した大学文書資料室の施設見学が行われました。



懇談の様子



## 東アジア共同体への経済・開発イシュー

江崎 光 男

東アジア共同体研究という大きなテーマの中の経済・開発イシューの分析という位置づけで、科学研究費・基盤研究(B)「東アジアの地域経済統合と成長・所得分配・貧困削減 - CGE モデルによる計量分析 - 」(平成16~18年度)の研究内容をご紹介します。

21世紀に入って「東アジア共同体」が現実味を帯びて議論されるようになってきました。東アジアとして概ね「ASEAN + 3」(東南アジア10ヶ国 + 日韓中3ヶ国、香港・台湾を含む)のような地理的広がりが想定されており、まさに戦前の「大東亜共栄圏」に一致しますが、戦前の悪夢というよりは、21世紀の夢と希望といった位置づけで考えています。EU(欧州連合)の場合、1952年の石炭鉄鋼共同体から1993年のマーストリヒト条約発効あるいは2002年のユーロ流通開始まで

40年ないし50年を要しましたが、東アジア共同体の場合はそれをかなり圧縮できるという楽観論がある一方、英国が(比喩的に)大陸に入るか米国の51番目の州になるかの選択に迫られているように、日本も同様の政治的困難に直面するとの指摘もあります。いずれにせよ、東アジア共同体は政治・経済・社会・文化・制度・安全保障上の諸(難)問題を克服して実現されるべき目標になりますが、その第1歩は、経済共同体の形成すなわちFTA(自由貿易協定)を含む幅広い経済連携を中心とした地域経済統合にあると考えられます。

経済活動のグローバル化と共に、世界レベルで国家間の地域経済統合が急展開しつつあります。東アジアにおいては、APEC、AFTA(アセアン自由貿易協定)を始めとして、多くの多国間・2国間のFTA(自由

計量分析の枠組み - 世界リンク CGE モデル

国・地域 (11地域)	産業 (10産業)	制度部門 (4部門)	ベトナム(中国・タイ・インドネシア)	
			家計部門	労働市場
中国	穀物農業	家計	農村家計1	熟練/フォーマル
インドネシア	他農林水	企業	・	熟練/インフォーマル
マレーシア	鉱業	政府	・	非熟練/フォーマル
フィリピン	食品加工	外国	・	非熟練/インフォーマル
タイ	軽工業		農村家計10	
ベトナム	重工業			
NIES(4ヶ国)	機械		都市家計1	
日本	公益業		・	
米国	建設業		・	
EU(15ヶ国)	サービス		・	
その他世界			都市家計10	

貿易協定)が提案され、交渉され、かつ実現されています。これら地域統合の意味するところは、貿易・投資の自由化・円滑化であり、基本的に、メンバー国の経済発展・成長に益すると考えられています。この成長に対する効果は全てのメンバー国で正なのか、そして、どの程度の大きさであり、効率・生産性・技術進歩を考慮して短期と長期でどう異なるのか、非メンバー国の成長に対する効果はどうなるのか。また、所得分配に与える影響、特に今なお貧困地域・貧困家計を抱える東アジアの低中所得国について、貧困削減に対する貢献は正なのか負なのか。望ましくない効果が得られる場合、その原因は何であり、どのような戦略的、政策的な方向性が考えられるか。このように、開発途上国を含む地域経済統合については、成長の問題のみならず貧困・分配といった最重要の開発イシューについても議論される必要があります。

この研究は、東アジアの地域経済統合が各国の成長と分配(あるいは開発と貧困)に与える効果影響を定量的に評価し、グローバル時代における国家間、国家、地域レベルの開発政策・開発戦略を考察し、中国がますます影響力を高めているであろう東アジア経済の将来を展望することを目的としています。計量分析の方法論は、産業をベースにするCGE(計算可能一般均衡)モデルです。特に、東アジア諸国、日本、米国、EU(欧州連合)が明示された世界リンクCGEモデルが構築され、動学モデルによるシミュレーション分析により、中長期の東アジア世界が共同体形成の視点から分析・展望されます。特に、中国、ベトナム、タイ、インドネシアについては、所得分配・貧困削減に焦点をあてた詳細な分析を試みますが、そのためのデータ・ベースとして、産業連関表等のマクロ・データに加えて、家計調査等のミクロ・データが総合的に利用されています。

現在、ベトナムに焦点をあてて、ミクロ・データの分析と世界リンクCGEモデルの作成をほぼ終えた段階にあります。都市・農村で10分位所得階層に分類された家計をベースにSAM(社会会計行列)を推計、

それに基づきベトナムCGEモデル(東アジア諸国・日米EUとリンク)を作成し、2001年の静学シミュレーションを実行した結果によれば、貿易自由化は、成長にも、厚生にも、貧困層にも、所得の分配にも、概して好ましい効果を与えているようです。その根拠、中長期の分析、中国・タイ・インドネシアの追加、各種FTAの分析、東アジア経済共同体への評価と展望が、これからの研究内容となります。本研究は、国際開発研究科の同僚諸氏、東アジアの母国で研究職にある本研究科修了生諸氏の協力を得て実施中です。

## プロフィール

えざき みつお



現職、名古屋大学大学院国際開発研究科教授。1943年、徳島県生れ。1966年、東京大学教養学部国際関係論分科卒業(教養学士)。1968年、東京大学大学院経済学研究科修士課程修了(経済学修士)。1974年、米国ハーバード大学大学院GSASよりPh.D.取得(経済学博士)。1968-69年、大阪大学社会経済研究所助手。1969-77年、京都大学東南アジア研究センター助手。1977-91年、京都大学東南アジア研究センター助教授。1991年より現職。1975-76年、フィリピン大学経済学部客員準教授。1978-79年、国連アジア太平洋経済社会委員会ESCAP経済問題担当官(在バンコク)。1981-82年、JICAインドネシア・プロジェクトで国家開発計画庁BAPPENAS駐在。1989-90年、フィリピン大学経済学部客員教授。1995-96年、国連大学高等研究所IAS客員教授。各種海外調査プロジェクトにより、タイ・インドネシア・フィリピン・マレーシア・ベトナム・中国への短期滞在多数。専攻は、開発経済学、計量経済学、東アジア経済。



## タンパク質の一生と細胞が働く仕組み

遠 藤 斗志也

生命活動の主演はタンパク質です。タンパク質はDNA という設計図に従ってアミノ酸がヒモのようにつながってきた高分子です。このヒモが折り紙のように折れたたまって、特定の立体構造をつくと、機能を発現することができます。これまでは、タンパク質は合成されれば、自発的に折れたたまって正しい立体構造を形成して機能を果たし、ランダムに分解されていく「自立した存在」と考えられてきました。しかし最近、タンパク質が働く場所、細胞という舞台では、話はそんなに単純ではないということがわかってきました。細胞内のタンパク質は、多くの場合ひとりでは機能できず、細胞内に周到に用意されたシステムによって、その状態と行動を監視され、助けられ、制御されてはじめて正しく機能を果たせるらしいのです。

たとえば、細胞内で合成されたタンパク質は、そう簡単に一人前にはなれません。細胞内で合成されるタンパク質という製品の「歩留まり」は高くなく、1/3は不良品だという推測もあります。そこで、生まれたタンパク質が不良品にならないように、一人前になるのを助ける「分子シャペロン」というものが細胞内では必要となってきます。分子シャペロンがタンパク質生産の歩留まりを高めているわけです。

さらに重要なのは、細胞の中には膜で仕切られた様々な区画、オルガネラが存在することです。細胞が必要とするエネルギーを供給するミトコンドリアや葉緑体、遺伝情報のデータバンクの核などがそうです。オルガネラのおかげで細胞は、複雑な化学反応を同時に別々の場所で進めることができ、膜の内外に物質を分けることで、エネルギーを貯えることも可能になります。バクテリアなどの原核生物が、動植物のような真核生物に進化するにあたり、細胞は内部にオルガネ

ラを作るという戦略をとったのです。しかしこれらのオルガネラが正しく働くためには、タンパク質をオルガネラの使命に応じて、正しく配置しなければなりません。そこで、生まれたばかりでまだ右も左も分からないタンパク質を正しい目的地に配送する、交通管制システムが必要となります。このシステムの主役が、たとえば各オルガネラ膜に存在する「トランスロケータ」です。トランスロケータは、一つ一つのタンパク質の通行証をチェックし、膜の壁を通り抜ける通路を開き、内部の適切な場所へと送り届けます。トランスロケータはどうやってこれらの複雑な仕事を効率良く

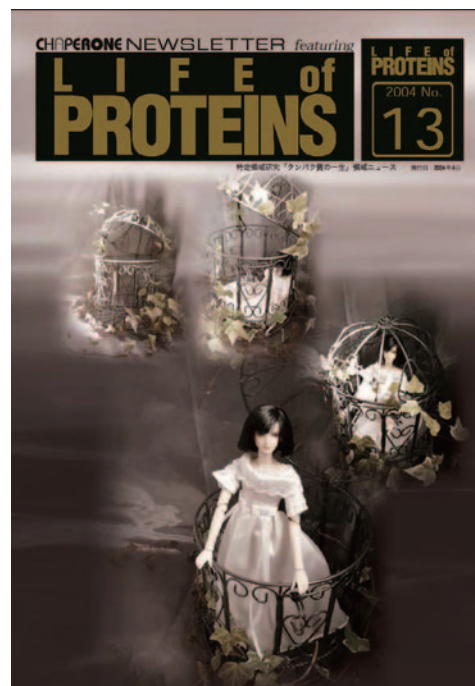


図1 筆者が編集している科学研究費補助金特定領域研究「タンパク質の一生」のニュースレター。表紙は分子シャペロン（ここでは鳥カゴ）の中で正しい立体構造を形成したタンパク質（ここではドール）が出てくる過程を示す。

こなしているのか トランスロケータの働く仕組みの解明は、私たちの研究グループがもっとも力を入れている研究テーマです。生化学、分子生物学、細胞生物学、構造生物学、遺伝学的手法を駆使することにより、行き先が書き込まれた通行証の実体とトランスロケータがそれを認識する仕組み、タンパク質をミトコンドリア内部の各区画に正確に仕分ける仕組み、膜を一方的に効率良く移動させる原動力などが明らかになりつつあります。

働くべき場所に無事届けられたタンパク質の運命は、もう安泰なのでしょう。実は細胞は温度異常、重金属、酸化など、様々なストレスにさらされており、これらが原因となって再び不良品が発生します。不良品が細胞にとって脅威となるのは、不良品は凝集しやすく、中途半端な凝集は細胞にとって重要なプロセスを阻害してしまうからです。そこで細胞は、分子シャペロンを動員して修復への手助けを図ります。しかし分子シャペロンをずっと動員し続けると、今度は細胞全体に大きな負荷がかかります。このような負荷を回避

する新しい修復方法として、糖を付加して不良品の溶解度をあげて凝集を防ぐ方法があることが、私たちの研究からわかってきました。修復がどうしてもうまくいかない場合は、不良品はゴミ箱行きとなります。不良品をどうやって見いだすか、更生かゴミ箱行きかの判定は誰が下すのか、など様々な問題が未解決です。しかしここにも分子シャペロンや糖鎖が重要な役割を果たしているのは確かなようです。

細胞社会とのダイナミックな関係の中で、タンパク質がどんな運命をたどっていくのか？私たちは、そこから「新しいタンパク質像」を明らかにしようとしています。

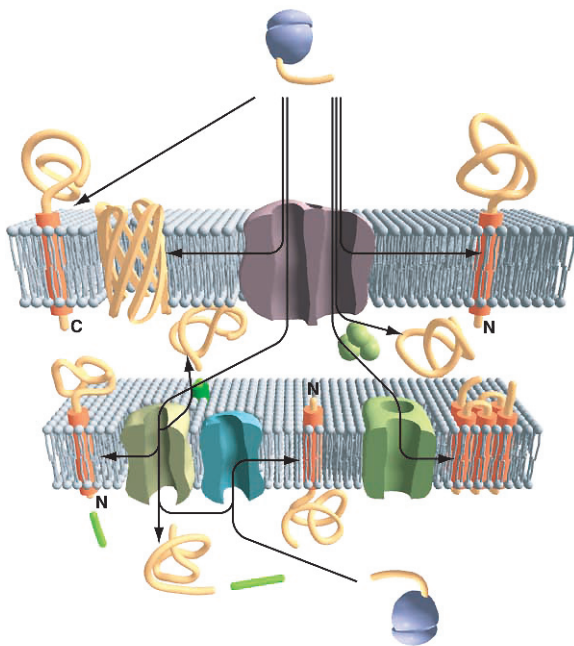


図2 ミトコンドリアのトランスロケータが媒介するタンパク質の配送経路。

## プロフィール

えんどう としや



1953年生まれ。1982年東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻博士課程修了。1982年群馬大学工業短期大学部工業化学科助手、同助教授、同工学部生物化学工学科助教授を経て、1989年名古屋大学理学部化学科助教授、1991年同教授、1996年より名古屋大学大学院理学研究科物質理学専攻教授。1998年日本IBM科学賞（化学）受賞。  
連絡先：endo@biochem.chem.nagoya-u.ac.jp  
研究室ホームページ：

<http://biochem.chem.nagoya-u.ac.jp/index.html>

# 臨界現象における 超スケーリングの発見について

渡辺 宙志

最近、"Superscaling of Percolation on Rectangular Domains" という題で2004年11月に Physical Review Letters に掲載された、臨界現象における有限サイズスケーリング理論を拡張した研究について紹介したいと思います。この研究は湯川諭(東大)、伊藤伸泰(東大)、Chin-Kun Hu(Academia Sinica, Taipei)ら4人による共同研究です。

相転移とは、非常に多くの構成要素からなる物質の性質が、ある条件(温度、密度など)を境に大きく変化することです。相転移には大きく分けて潜熱を伴う1次転移と伴わない2次転移に分けることができます。2次転移では、臨界点の近傍で物理量が異常な振る舞いを示します。これら異常な振る舞いは臨界現象と呼ばれ、現在も活発に研究が行われています。

臨界現象を起こすもっとも簡単なモデルの一つが、浸透問題(Percolation)と呼ばれるモデルです。たとえば碁盤の目のような道路で、向こう側に渡りたいとします。しかし、雪のために所々で通行止めになっているとしましょう。1辺の道路の数を  $L$ 、各道路を通

行できる確率が  $p$  であるとき、この人が向こう側へ渡れる確率を  $E(L, p)$  とすると、 $E$  はある確率  $p_c$  で急激に立ち上がる関数となります。この確率  $p_c$  を臨界点と呼び、臨界点より低密度側では、向こうに渡れないので非浸透相、臨界点より高密度側では浸透相と呼ばれます。これを浸透転移と言います。電気伝導や森林火災、伝染病の伝播など、世の中には浸透問題とみなせる現象が数多くあります。

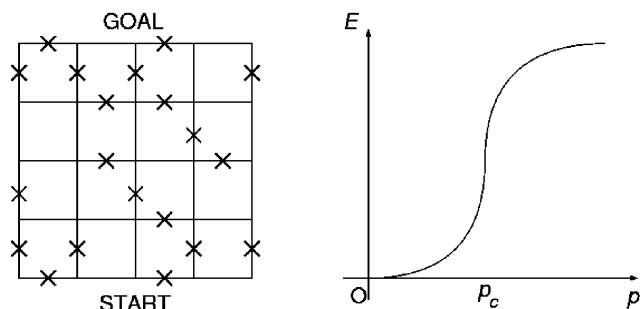


図1. 碁盤の目のような道路が、確率  $p$  で通行できる時、手前側から向こう側へ渡ることができる確率  $E$  は右図のようになる。

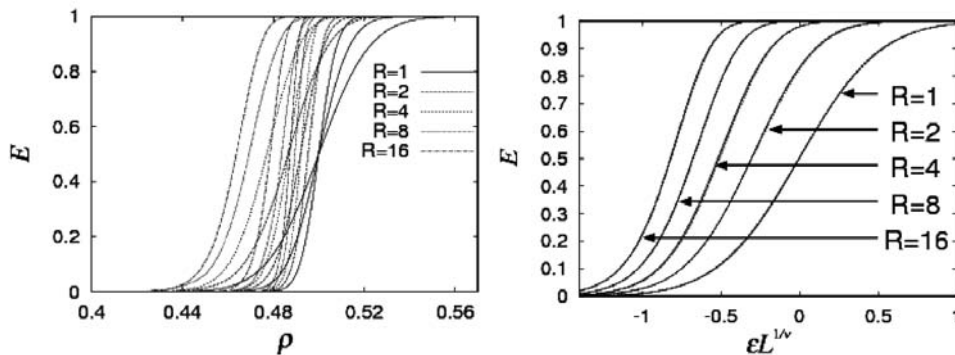


図2. 左はボンド過程においてシステムサイズ  $L = 64, 128, 256$ 、アスペクト比  $R = 1, 2, 4, 8, 16$  の全15種類の系についての結果。右は有限サイズスケーリングの結果。アスペクト比ごとに同じ関数形を持っている。

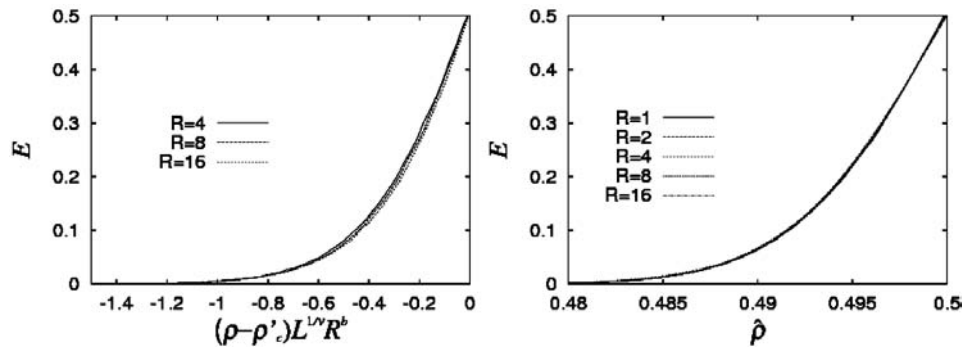


図3 . 左は図2のデータを超スケーリングした結果。右はさらに非線形スケーリングを行った結果。すべての曲線が一つにまとまる。

向こう側へ渡れる確率  $E$  は、臨界点の近傍で  $E(p, L) \approx F(\varepsilon L^{1/\nu})$  と振舞うことが知られています。ただし、 $\varepsilon$  は臨界点からのずれ  $|p - p_c|/p_c$  を表します。この関係式は有限サイズスケーリングと呼ばれ、関数  $F$  は、有限サイズスケーリング関数と呼ばれます。  $\nu$  は臨界指数 (critical exponent) と呼ばれるもので、次元にのみ依存する普遍的な値 (二次元では  $4/3$ ) を持ちます。さて、この臨界指数のみならず、関数  $F$  の形状も普遍性を持っていることが分かってきて、普遍有限サイズスケーリング関数 (Universal Finite-Size Scaling Function) 略して UFSSF と呼ばれます。

ここで、正方形以外の形をした系での臨界現象を考えて見ます。系の縦と横の大きさの比 (アスペクト比) を  $R$  とすると、確率  $E$  は、 $R$  の関数でもあるはずですが、臨界指数と異なり UFSSF は境界条件に依存するため、これまでは異なる  $R$  を持つ系では異なる関数形を持つと思われてきました。しかし、我々は見かけの臨界指数  $\nu'$  と、新しい指数  $b$  を導入し、 $R$  を含めたスケーリング式を予想し、これを数値計算で確かめ、超スケーリング (superscaling) と名づけました。さらに、浸透クラスターに属す道路の割合 (浸透確率)  $P$  についても同様の超スケーリングが成り立つことを確かめました。これは、系の大きさだけでなく、形状についてもスケーリングが成り立つことを意味します。

この研究は浸透問題という古典的な問題に新たな問

題を提起することになりました。新しく導入した指数  $b$  が、(臨界指数なら同じ値を取るべきであるのに)  $E$  と  $P$  で異なる値 ( $0.14$  と  $0.05$ ) を持つことはなぜか、その値は解析的に求まるのか、もしくは他の指数と関係づけられるのか、他の系 (たとえば磁性体) についても超スケーリングは成り立つかなど、今後のさらなる研究が待たれています。

### プロフィール

わたなべ ひろし

2001年東京大学工学部物理工学科卒業。

2004年東京大学工学系研究科物理工学専攻修了。工学博士。

専門は計算物理。大規模な数値計算を行い、結果を統計力学的な手法で解析を行う。大規模な並列計算や新しいアルゴリズムなど、数値計算技術の開発にも注力している。主に粒子系を扱うが、古典力学系だけではなく量子計算機、人工生命にいたるまで、計算機でできることはなんでも興味の対象である。趣味はプログラム。



## 特集

### 平成16年度 定年退職教授のことば

定年を迎えられ、この3月31日をもって退職される次の教授から、本学を去るにあたってのことばをいただきましたので、掲載します。

田中 宣 秀（大学院教育発達科学研究科）

北原 淳（大学院経済学研究科）

山田 鋭 夫（大学院経済学研究科）

舟橋 重 信（大学院理学研究科）

中村 蓼 吾（大学院医学系研究科）

西村 正 彦（大学院医学系研究科）

三宅 養 三（大学院医学系研究科）

石黒 彩 子（医学部保健学科）

宮原 洋（医学部保健学科）

岩田 好一朗（大学院工学研究科）

河出 清（大学院工学研究科）

菊山 功 嗣（大学院工学研究科）

後藤 俊 夫（大学院工学研究科）

小林 一 清（大学院工学研究科）

坂 公 恭（大学院工学研究科）

正 畠 宏 祐（大学院工学研究科）

水谷 宇一郎（大学院工学研究科）

水谷 照 吉（大学院工学研究科）

近藤 忠 雄（大学院生命農学研究科）

宮田 正（大学院生命農学研究科）

山根 恒 夫（大学院生命農学研究科）

小栗 友 一（大学院国際開発研究科）

長谷川 勝 夫（大学院多元数理科学研究科）

井原 俊 輔（大学院情報科学研究科）

峯村 吉 泰（大学院情報科学研究科）

渡辺 久 士（エコトピア科学研究機構）

北川 勝 弘（農学国際教育協力研究センター）





## 楽しく勉強させて頂き感謝・感激です！

田中宣秀（大学院教育発達科学研究科）



楽しくもあり、苦しくもあった3年半の教員生活でした。専攻会議や教授会での種々の議論に接していると、今さらながら、民間出身の小職をフルタイムの資格を持つ教員として迎えていただいた名古屋大学の勇氣ある決断に対し深謝しています。この3月末で、実に人生4回目のキャリア・ステージを降りることになりますが、これほど楽しく研究させていただいたのは初めてです。小職は、生涯を通して人材の教育・支援をめざす「人材開発科学」を担当しましたが、この名称の研究領域は、全国の大学に先駆けて設けられたものであり、今後ますます必要となると確信しました。ただし、関連領域の研究者はわが国に多数いますが、「生涯を通しての人的資源開発」という視点で研究している学者は数えるほどしかおりません。求められる人材として、企業での実務経験を持ち、学会等でもグローバルに通用する論文を発表している人と仮定しますと、産業界でも見つけ出すことは難しく、今後産学の連携を通じて育成していく必要があります。

5～6年前の話ですが、たまたま小職が経済団体にいた関係上、この分野の適任者を探すお手伝いをしたことがあります。トヨタ自動車や松下電器産業などのわが国を代表する企業におきまして、年齢を指定されますと、「難しい」という答えでした。その後、何年かして自らが参上する結果になったのは皮肉ですが、求められている人材と異なっていたからでしょう。毎週、授業の準備などで手間取り、塗炭の苦しみも味わいました。感動を与える授業が出来たのか自問しますと、内心忸怩たるものがあります。

教育活動のなかで、楽しかったのは、『基礎セミナー』への関与です。「大学で如何に学ぶか」というテーマで、増田四郎先生の『大学で如何に学ぶか』、高島善哉先生の『社会科学入門』、水田 洋先生の『アダム・スミス』など教材として勉強しましたが、どの学生も極めて優秀でした。

しかし、一方において専門課程の授業や卒論指導に携わってみますと、基礎セミナーの学生と余り変わったところがなく、2・3年生の教育が中抜きされたように感じました。これは私だけの印象でしょうか。

産業界にいた頃、「大学改革」提言に種々係わったことがあります。この10年で、入試科目の増加、競争原理の導入、産学や地域との連携活動、自己点検評価や財務内容の公開など徐々に進んできています。しかし、手付かずの課題は、学部学生をどのように厳しく教育していくかという出口管理の問題です。多くの学生は、1年生の時には頑張るが、慣れてくると遊び、就活を始める3年生の秋に将来のキャリアを考え始め、4年生の夏頃から卒論に取りかかるというのが一般の学生のパターンです。これで良いわけがありません。今後、この出口管理の問題に取り組んでいかないと、私立大学には負けず、グローバルな社会で通用する人材の養成はできません。大学自身も世界的な競争力をもった教育力・研究力をもたないと、優秀な高校生を欧米の大学に逃すケースがでてきます。

しかし、幸いなことにわが名古屋大学の場合は、優秀な素質のある人材が入ってきますし、世界各地の一流大学と交換留学生に関する協定を持っているのですから、教育の質を高め、特色ある指導をしていけば、改善は容易です。学部時代に海外留学という道もありますし、修士課程を海外の大学で、博士課程を名古屋大学でという選択肢も出口管理次第です。名古屋大学に係わった優れた人材や力のある外国人研究者を教員として迎えるという大胆な発想も結構です。大学を去るにあたり、この3年半の思いと今後の夢も描きながら、お別れすることにします。どうも大変お世話になりました。

## 国立大学を去るにあたって

北原 淳 (大学院経済学研究科)



約30年間の国立大学での勤務を終えることになる。それ以前の職場も含めて、3ヶ所を渡り歩いてきたが、最後の名古屋大学は6年半であった。40年前の学部卒業時、日本の大学には、「印度哲学」、東洋史以外に職はなく、アジア研究はマイナーで絶望的な分野だった。時代のおかげで、この分野で何とか食えて、定年を迎えることができた。

さて、ヨーロッパでの大学の伝統では、教師は「渡り職人」だったらいい。時折、渡り職人の悲喜を歌った「冬の旅」を聞きながら、そのことを自覚してきた。現実の日本の大学ではむしろ、「地付き職人」の方が多いように思う。大学の行政面では、「渡り職人」よりも「地付き職人」の方が貢献できるかもしれない。「白い巨塔」や「文学部只野先生」がえぐるような側面もある大学世界はある意味では厳しい。地付き共同体の奥や裏まで知らないと、まともに役職は務まらないかも知れない。ちなみにこの点で、この「渡り職人」の役職経験者は名古屋大学にご迷惑をかけてしまった。ただ、そのおかげで、そうでなければ一生ご縁のなかったはずの先生方や事務官の方々と知り合いになれたと思う。

教育や研究の面では「渡り職人」と「地付き職人」の役割はそれほど変わらないかもしれない。しかし、集団と個人のどちらが大事かは、専門分野によって異なるかも知れない。理系の多くの研究室では集団的チームワークが必要であり、地付きの存在が大きい場合もあるかもしれない。しかし、たとえば、文系のある分野には個人の思索、研究しかないのかもしれない。たしか1930年代出発の教養教育アメリカ・モデルの結果、全学問の源流であることすら忘れ去られた「ギリシャ哲学」は、今もその典型であろう。こういう専門

分野のすぐれた「渡り職人」は、個人1人でも大学を救うだろう。

ヨーロッパの大学は師弟全寮制の共同体だったはずである。一緒に寝泊りしながら研究、教育を行い、人間として触れ合った。その伝統は、実験系や調査系の集団生活が引き継いでいるのかもしれない。自分も、寝泊りしながらフィールド調査と一緒にやった昔の学生たちとの人間的触れ合いは今も消えない。ただ、「権力関係」などと言わないまでも、人付き合いの下手な学生には大きな負担であることも教師は自覚すべきであろう。全寮制の時代なら、活発な学生は、時間におかまいなく、教師に議論をぶっかけて押しかけたはずである。その代わり多分、授業の時間割なぞ緩やかで、休講なぞ当然だったはずである。振り返ると、自分とはとくに学部学生には良き教師ではなかったと思う。しかし、院生ゼミや博士論文審査には自ずと力が入り楽しかった。時間にとらわれずに自分も教えられる、という伝統が生きているからであろう。

国立大学法人となってからの大学運営は、どこもかしこも、理念よりも経営優先のようである。おそらく、法人化は、戦後日本の大学史では、教養教育はおろか、学部専門教育さえ放棄した感のある「教養部改革」に次いで、「理念なき改革」の第二波であり、しかも、理念なき点で後世への影響はもっともっと深刻であろう。学部専門教育は教養部教育の延長、という教養部改革時のモデルには、まだしも理念があったのか知れないからである。そういう時代に国立大学を去る自分は幸せなのかもしれない。

## 科学か学問か

山田 鋭夫 (大学院経済学研究科)



ここで私のささやかな経歴や思い出話を披露しようという気はない。何十年来、大学という場に身をおいて研究と教育の一端に携わってきたが、そのなかで長らく心の底でもやもやしていたこと、そして、それを語るには今日の大学という場はあまりに不向きだと感じていることについて、一言。

大学が使命とすべきは「科学」なのか「学問」なのか。もちろん、大学の「使命」なるものは、社会貢献だとか人材育成だとか、多様な言葉で語りうるであろう。だがしかし、いわゆる研究と教育の原点でもあり接点でもあるところに「学」というものの生産と伝達があることは、誰も否定しえない。ここに「学」とは、英語でいえば science、knowledge、-sophy など、いずれでもよかろう。問題はその「学」を「科学」に傾斜して捉えるのか、「学問」に重きをおいて理解するかということである。

「科学」の「科」とは「分ける」という意味であり、したがって科学とは、学や知を細分化したうえでその部分的対象の正確な認識を得ようとする所業である。いわゆる専門化と専門用語による精密な客観的認識である。これに対して「学問」には「学を問う」「学び問う」というニュアンスがあり、そこには一人ひとりの具体的な人間の主体的営為が想起されている。「精密」「先端」というよりも、場合によっては主観的でさえあるかもしれないが、しかし個人の人生や生活にとって真摯かつ切実な問題への答えにつながるものとしての知の姿が、そこにはある。いったい大学が、いや大学に限らずわれわれの社会が課題とすべきは、「科学」なのか、「学問」なのか。

現実の動き、とりわけ昨今の動きをいえば、「学」はますます「科学」化しており、非「学問」化、そし

て場合によっては反「学問」化していることは明らかである。大学内を見わたしても、「先端……」「高等……」という形で細かい専門研究が華々しく謳われて、「科学」なるものが闊歩している。これに対して「学問」の方は、「教養」「人文」の語と同じく片隅に追いやられている。それではいけないとの声もあって、時々思い出したように「総合……」とか「……融合」とか唱えられるが、所詮、焼け石に水。「学問」という言葉が発しにくい雰囲気にあるだけでなく、大学内ではこの言葉はもはや死語になっていないか。

「学」や「知」のあり方が問われているのである。部分の正確な認識としての「科学」なのか、それとも、深くも精密でもないが、自らの生をとりまく全体をそれなりに的確に捉える眼としての「学問」なのか。もちろん答えは、あれかこれかの二者択一でなく、「か」のなかの「と」、「と」のなかの「か」という、それこそ弁証法的なものとしてあろう。分野によっても、どちらに比重をかけるべきかのちがいはあろう。

しかし重要なことは、大学人が「科学」主義に安居するのでなく、「科学」と「学問」の葛藤を自らの課題として背負いつづけることにある。さらに言えば、「科学」において「学問」に通じること、「専門」において深いゆえに「素人」に通じる言葉をもつことにある。これを抜きに「総合……」を企てても寄せ集め以上のものにはならない。また、これを避けて専門的知識を語ったところで、それは学生への教育にならない。そんな学的スタンスのもとで「勇気ある知識人」が育つとは思えないのである。

## 研究の小径を彷徨って40年 - 偶然の連続 -

舟橋重信 (大学院理学研究科)



理学部のある近くの大学という単純な動機で名古屋大学理学部に入学して以来、44年の長きにわたって名古屋大学でお世話になった。昭和36年名古屋大学に入学して、当時教養部のあった滝子に通った2年間は60年安保などであわただしい雰囲気のうち過ぎた。しばしば休講状態があったし、デモにも参加した。それらを通じて社会を考え、友達との懐かしい思い出もあるが、後で考えると虚しい時期でもあった。3年からの学部生活は、今の東山キャンパスに来たが、当時は、赤土剥き出しで、雨が降ろうものなら歩くのにも苦労する程であった。今のキャンパスは別世界である。

化学科に進学した3年生の終わり頃までは、大学院進学など考えもしていなかった。分析化学講座の田中元治教授のご指導で卒業研究を始め、実験・研究の魅力を感じ、修士、博士課程に進むことになった。当時は理学部には(研究者ではなく)学者先生が多々見られ、おれも“学者”になれたらな—と思う時期であった。昭和43、44年には大学紛争があり、豊田講堂や大学本部が一部の学生によって封鎖された。研究室の薬品棚をカムフラージュしたことを思い出す。一番研究ができる博士課程の時期に大学紛争という不幸があり、右往左往した時期を何とも虚しく思い出す。

博士課程を満了してすぐ昭和45年4月に助手になる機会に恵まれた。ほぼ前期の間は3年生の分析化学実験の担当で、夜の7時、8時まで付き合うのは常であった。昭和48年に助教授になり、恩師田中先生には自由に研究する環境を与えて頂くと同時に、いつも適切なお指導とサポートをして頂き、研究に熱中することができた。当時は、分析化学反応を速度論的観点から研究することは稀であった。平成2年に分析化学講座を担当することになった以後は、今までの研究に加え、

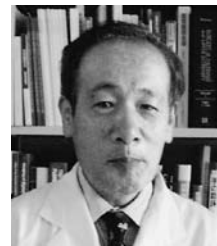
時間軸を入れた分析化学(動的分析化学)の展開を模索してきた。溶液内化学反応の動的過程を熱力学的、速度論的および構造化学的見地から研究し、特に反応動態の分析・解析のための新しい方法論を開拓しつつ、金属イオンの動的挙動を解明してきた。溶媒和構造や溶媒交換反応速度に基づく金属イオンの動態の解明、錯形成反応や配位子置換反応の機構解明と分析化学的応用、短寿命中間体の検出・構造解析と動的分析化学への展開といった研究である。あちこちに繋がる研究の小径を彷徨いながらも、あちらこちらに小さな道しるべを立ててこられた幸せを噛み締めている。

学者には成れなかった。残念ながら周りを見ても大学院生時代に描いた学者は見当たらない。今振り返ってみると、願望通りには何一つ行かなく、すべて偶然の連続の結果であると思えてならない。学生時代から44年の長きにわたり、名古屋大学で学び、教え、教えられ、研究に熱中する機会を与えられ、多くの優れた先輩や仲間にも恵まれ、また若い学生諸君とも生活を共にできた幸せな偶然の連続に心より感謝したい。

大学を取り巻く環境は激変しつつあると実感していますが、個々人が希求する研究・教育を展開できる環境を尊重する気風が今後も名古屋大学理学部で続いていくことを願っています。改めて、お世話になった多くの方々にお礼申し上げるとともに、法人化を契機に大きく動き出している名古屋大学が益々発展することを祈ります。

## 手の外科と35年

中村 蓼 吾 (大学院医学系研究科)



手の外科と聞いても、そんな分野が医学にあるのか、何をしているのか、聞かれることが少なくない。実のところ無理からぬことであろう。手の外科を修得するには整形外科あるいは形成外科医となってからさらに手の外科の専門修練を必要とする。この整形外科(運動器障害の診断治療)と形成外科(外形の異常、機能障害の診断治療)の区別も十分社会に理解されていない。さらに手の外科は標榜診療科や日本医学会の分科会に申請してもいまだ承認されていない専門分野でもある。手の外科医と言える外科医が生まれたのは第2次大戦中で、学会が設立されたのが米国で昭和21年、日本では昭和32年のことであった。本来の手の先天異常、外傷、障害の診断学、治療学を扱う分野であるが専門化したのは手の構造が複雑で、機能が精微なため、通常の外科手技では治療成績が不良なことに一因がある。運動器であってもセンチ単位の手術をミリ単位で行うところに本領があり、手術用顕微鏡の導入により0.1ミリを問題にする手術さえある。この様な技術的な力が元になり、現在では手の外科医が肩関節をのぞく上肢の外科を行っている。また外科的治療が適応できる末梢神経障害では下肢も対象とする。社会的には1970年代に指の再接着術で、マスコミをにぎわした。学びはじめた頃と比べれば、治療手技、成績ともに向上したが、先天異常、腱、神経損傷、関節障害の治療は難しく、成績が不十分である。端的に言えば日常、外傷を受けやすい手であるが、単なる切創は機能障害を残すことは稀だが、腱、神経、関節に外傷が及ぶと障害を残しやすい。私自身は昭和35年に本学に入学し、滝子の教養学部で学び、41年に医学部を卒業した。インターン後整形外科を選んだが、人事の都合で手の外科を専門とする整形外科のあった附属病院分院整形外科へ配属され、三浦隆行先生(現名誉教授)の指導を受けた。当時分院は東新町の北方、東門前町に

あり、交通の便はともかく、狭く、手術室も今考えれば、ずいぶん不潔であったが、現在のような院内感染が頻発することはなかった。各科とも異常に熱気があり、何とかこの境遇を打開すべく努力していた。昭和54年に大幸町に移転し、ようやく病院らしくなり、明るい活気のある施設となった。大幸町時代が附属病院分院の最盛期であったが、国の方針に逆らいがたく、平成8年12月鶴舞の附属病院に統合となった。98床という分院の規模は人のつながりで運営できる規模で、効率のよい病院であったが統廃合となったのは個人的には残念であった。手の外科を診療科として独立させて欲しいというのが分院時代からの念願であったが、紆余曲折の末、平成12年度に医学系研究科運動形態外科学の中に手の外科が設立された。国内では唯一の公的な手の外科を名乗る単位が実現し、個人的にも、日本手の外科学会にとっても盛挙であった。実現に頑張っていた加藤延夫元総長ほか、多くの先生に感謝の念に耐えない。大幸町時代より手関節外傷、障害の診断学、治療学の確立を目標に研究を進め、多少なりとも成果を挙げたが、評価は歴史の判定を待つしかないであろう。嬉しいのは、手の外科を学ぼうとする若い医師が、続々と現れたことである。現在では教室内に、病院講師1名、助手1名、医員2名、大学院生7名と10名を越える世帯ができた。手の外科学教室が、日本手の外科の拠点として、さらに発展していくのを見守りたい。

定年になったとは言え、まだ目もよく見え、顕微鏡下の手術も行えるので引き続き現場で頑張ることにした。中日病院の御支援ももとに名古屋手の外科センターを同病院内に開設し、診断・治療・研究を続ける。引き続きの御指導、御支援を御願います。

## 直感の人生

西村正彦 (大学院医学系研究科)



名古屋大学農学部畜産学科10期生として1960年に入学し、10年間学生としてお世話になった。その間、教養部があった滝子で2年間を過ごした後、当時農学部があった安城に通った。大学院後期のときに安城から現在の東山キャンパスへの移転となり、近代的な研究室へと引っ越した。

名大生になったきっかけは、母校の一宮高校の担任の先生にとにかくネームバリューをとって名大へ入れ、農学部なら絶対合格だと言われた。高校の3年の担任はとにかくたくさん名古屋大学へ入れたがっていた。それは今考えると高校の実績づくり(担任の実績作り)でもあった。

名大の農学部畜産学科に入ってみたら定員20人のところが13人しか入学していなかった。おかげで生徒より教官の数の方が多くてとても可愛がられた。ある授業で先生の言われた、「パイロットは、とにかく滞空時間が多くなるよう努力しなければいけない」という言葉を今でも忠実に実行して誰より夜遅くまで滞在することを35年間以上ずっと実行してきた。ワーカホリックというより、ただ能率が悪いせいで24時間空調の施設の居心地の良さにだらだらと長居していたというのが本当のところである。

どうして実験動物学を選んだかと言うことを知りたがっている学生もいることなので以下に書き記すことにする。要するに進路を決めるときに自分の成績のなかで最も悪かった動物育種学を専攻することに決めたのは、苦手だけど非常に面白い学問と直感したからである。結果的に成績の一番悪い科目を自分の一生取り組むことになった。育種学教室へ入っても進路に分かれ道があり、一つはフィールドワークによる家畜や野生動物の集団遺伝学、もう一つはラボラトリー内で実

験動物を用いる研究であった。私は後者を選び、更に2本足(鳥類のこと)か、4本足(マウスのこと)かを聞かれて、又直感で4本足を選んだ。その中でも最も魅力的に思えたのが医学・生物学研究に役立つ実験動物に携わる分野であり、特にヒトの病気の究明に役立つ疾患モデル動物の育種学的研究であった。当時近藤恭司先生によって開発されたKKマウスが名大医学部解剖学の中村三雄先生によって2型糖尿病モデルとして注目された時期であったことから、育種学的に糖尿病マウスの開発・改良を行うことが卒論テーマとして与えられたのが、実験動物育種学研究の出発点であった。以後、糖尿病に限らず、原因が未解明のメンケス症候群、慢性膵炎、動脈炎、チェジアック東病等の難病のモデル動物の開発を行った。

名古屋大学大学院生を終えた後、和歌山県立医大で10年、浜松医科大学で18年、そして名古屋大学へ戻って医学部で7年弱、全て動物実験施設教官として実験動物学ひとすじで過ごした。今に至るも教室へ入局したときの選択が正しかったとつくづく思うこのごろである。今もマウスからは離れがたく退職の直前までケージ交換の毎日を送っている。

## 退任に寄せて

三宅 養三 (大学院医学系研究科)



1967年に本学医学部を卒業し、インターン後眼科学教室に入局いたしました。その後1976年から3年間ハーバード大学に留学したのと1981年に8ヶ月ほど中京病院に赴任した以外はすべて名大病院にお世話になり、母校の思い出はつきません。今振り返って、つくづく眼科学を選考してよかったと思います。眼科のよさは視機能が回復した患者さんの喜びが他科に比べて間違いなく大きいこと、それに奥深い研究が満喫できることです。米国に留学していたときに感じたことですが、欧米ではこのような理由で、眼科の社会的、それに医学会の中での地位が日本とは比べ物にならないほど高いのです。そのためかハーバード大学医学部の卒業生で成績優秀なトップ10名のうち5名程度が眼科志望とききました。しかし競争が激しくなかなか眼科医にはなれないのが現状のようです。

こういう情勢は少しは米国に似てほしいのですが、日本の状況はずいぶん違うようです。それでも欧米の一流医学誌の採用状況や臨床医学の実力をいろいろな方法で評価すると、日本の眼科の国際的レベルは米国について2番目という大変勇気づけられる結果が報告されています。これらの事実を総括して、私は眼科の地位が日本の社会のなかでもっともっと高くなるべきであると思っております。眼科は小さな臓器をいじる科と考えられるかもしれませんが、専門学会は30を越しており、眼科学は大きな学問であったと思います。また高齢化社会において眼疾患はその数が著しく増加しておりますが、視機能の回復は単に眼の回復にとどまらず、高齢者に多くの2次的な波状効果を挙げ、社会的にも大きく貢献いたします。

私の専門は網膜生理でしたが、網膜は実に脳とよく似た特性を持っていることに幾度も驚かされました。

90年代はよく「脳の時代」と言われましたが私は同じような学問的進歩が網膜でもみられ「網膜の時代」とも呼んで欲しかったと思います。私のグループは網膜の視覚病態生理の解析により、多くの新しい疾患概念を提唱し、その一部が遺伝子学的に証明されたことは私にとって望外の喜びでありました。

臨床医学は患者さんが相手であるため、仕事は夜昼をとわず押し寄せ、研究はその間をぬって行わなければなりません。実際、名古屋大学眼科のもう一人の教授である寺崎浩子先生は家庭を持ちながら土日も夜遅くまで手術をしている姿をよくみてきました。私は医局員には、この世界で一級になりたかったら土日はもとより睡眠も惜しんで仕事をすべきであることをいつも申してきましたが、最近では労働基準法を守らない私のような指導者は罰せられる時代になったようです。さりとは医療の社会情勢はいかにも厳しく採算を価値観に入れなければならないようになった大学病院で仕事をする魅力が順に無くなる危険がありますが、これを解決するにはおもしろい研究で若い人にやる気をおこさせる以外には方法はないのではないのでしょうか。ますます指導者の能力が問われる時代となってきました。名古屋大学でよい指導者が育つことを祈ります。

## ハードルが高くて、 やりがいのあった教員生活

石 黒 彩 子 (医学部保健学科)



昭和35年、名古屋大学医学部附属看護学校受験のために歩いた鶴舞公園周辺の景色を鮮明に思い出します。あれから45年の永きにわたって名古屋大学でお世話になりました。医学部附属病院での看護師としての17年間は大半が小児病棟勤務でした。可愛かった子どもたち、時には悪態をつかれたり、当時は不治の病と思われた白血病の子どもたちを看取って涙したことなど、子どもたちと家族から学んだことが、その後の看護教員としての25年間を支えてくれました。医療技術短期大学部に転任し、小児看護学新米教師の私はレポート課題をたくさんだして学生から苦情を言われることもありました。特に「育児用品」に関するレポートは実際に売り場に行って調べなければなりません。店員に“いつお生まれになるのですか”と聞かれたとプリプリする学生の言葉に笑いをこらえたものです。小児病棟実習でも、受け持ち患児の看護以外に、未熟児室見学、外来見学、他の小児病棟見学、集団遊びと盛りだくさん、そして学内演習も、調乳・授乳、採尿、点滴、保育器の操作など、これも盛りだくさん実施してしまいました。しかし、学生の反応と理解度を考慮して次第に項目を精選していきました。教育のかたわら、上司の鳥居新平教授の指導のもとでアレルギーをもつ子どもと家族を対象とした研究にも取り組みました。主にアレルギーとしてのダニ・真菌、気道刺激物質としての窒素酸化物・ホルムアルデヒドの汚染の実態調査を行いました。特にNO<sub>2</sub>と真菌による室内汚染の実態はマスコミにとりあげられて住環境と生活様式の改善に微力ながら貢献したと思います。そんな中、鳥居教授の鶴の一声で病態制御医真菌研究室の田中健治教授の研究生となりました。本間道夫講師(現、理学部教授)にはアレルギー分析に関する様々な実験手技を教えて

いただきました。ヒト血清IgEが反応する*Candida albicans* 抗原蛋白を精製し、46kDa 抗原のアミノ酸配列の一部が*S. cerevisiae* の解糖系酵素;Enolase と高い相同性があることを見出し、これがinfection and immunityに掲載され、博士(医学)の学位を授与されました。国際免疫学会連合のアレルゲン命名小委員会においてEnolaseが*C. albicans* のアレルゲンとして採択されたことで、迷惑? 研究生の恩返しはほんの少しかできたように思います。同時期、文部省在外研究員としてアメリカ合衆国(カリフォルニア州立大学フレズノ校)へ出張し、白血病と喘息小児の看護の日米間比較を行うという機会にも恵まれました。その後、医学部保健学科、さらに博士課程設置の準備にも深く関わらせていただきました。特に保健学科設置のための看護教員探しは困難を極めました。当時の國井鏡短期大学部長のご努力には深い感謝の念を覚えます。保健学科がスタートすると同時に、看護学の充実と発展をめざして当看護学専攻が日本看護医療学会設立の中心となりました。順調に活動を続け、ホームページの立ち上げが実現したことは大きな喜びです。科学研究費の助成を受けて喘息児の家庭訪問による環境改善の指導、療養のための自己管理の指導と家族看護にも取り組めたことは幸いでした。平成14年からは基盤研究(A)(2)の助成を受けて喘息学童を対象とした自記式QOL調査票(Japanese School-aged Children with Asthma QOL; JSCA-QOL Ver.3)を開発し、全国調査を実施、成果発表を行えたのはひとえに優秀なスタッフに恵まれたことによります。いつもハードルが高いと感じながら、それでもやりがいのあった名古屋大学での教員生活でした。皆様ありがとうございました。



## 楽しんだ放射能研究と放射線教育

宮原 洋 (医学部保健学科)



1960年に名古屋大学工学部応用物理学科へ入学し、卒業研究で故加藤範夫教授、故美浜和弘助教授のX線・電子線の研究室を希望したことが放射線との出会いであった。修士2年の夏、野沢温泉での物性夏の学校に参加した時、私と他の一人の学生に対して「愛知県がんセンターと工学部に新設された原子核工学科のどちらかに決めてください」と教授から電話があった。先輩ががんセンターを希望した結果、私は1966年から原子核で放射線計測を糧にすることになった。その後、1998年に4年制化した医学部保健学科に移り、放射線技術科学専攻で教育・研究を続けてきた。

原子核が完成した頃から、放射線計測の基礎分野に研究の重点を移し、放射能精密測定という放射能計量学 (radionuclide metrology) を主テーマとして、今日まで研究を行ってきた。放射能標準の国家機関である電子技術総合研究所 (現、産業技術総合研究所) 日本原子力研究所及び名古屋大学で世界の中に日本が確固たる地位を築いた時期に、Lowenthal 博士に何度か出会い、世界に出てゆくよう進められた。成果も、名古屋大学で世界に先駆けて開発した、2次元データ集積システムを用いる4

- 同時計測装置は、精度・時間・手間のあらゆる面で放射能絶対測定を一変するものであった。このテーマを携えて1987年にローマで開かれたICRMのシンポジウムに始めて参加し、Lowenthal 博士の支援もあって世界にアピールすることができた。その後、隔年で開催されるこのシンポジウムには欠かさず参加している。

一方、線検出器をNaI検出器からGe検出器に換え、放射能絶対測定だけでなく線放出率測定を高精度で行うことを可能とした。線放出率は医・理・工学等の分野でRIを利用する際に重要で、特に放射化分析では100%この値に依存していて、多数の核種で数%から数

十%に及ぶ誤りを見出した。特に、 $^{175}\text{Yb}$  で100%の違いを報告した結果、すぐにこれまでの疑問点が解決したとの論文が出された。しかし、世界で最も通用している評価値の訂正は10年経った昨年であった。数年前からは20数カ国の国家標準機関の代表と数名の研究者から構成されるICRM (国際放射能計測専門委員会) のメンバーで、この委員会及びBIPM内の関連委員会で放射能計量学に関する議論を行っている。既に日本原子力研究所が関連基礎分野から撤退し、私も大学を辞することにより、この分野での日本の基礎が揺らがないか心配される点である。

ところで、原子核工学科でも放射線技術科学専攻でも、新入生はほとんど放射線に対する知識を持たず、X線写真は簡単に受け入れてもRIはなんとなく怖いとの観念があり、卒業までに考えを改めてもらうのが第一歩である。理科教育法、公開講座、オープンスクール、講演会、出張授業等の機会を通じて、他学部・他専攻の学生にも話をしてきたが、更なる努力が必要である。ほとんど100%が医療の現場に入る保健学科の卒業生でも、放射線技術科学専攻以外では放射線に関する知識が乏しく、医療の現場で患者さんからの質問に答えられるのか心配である。これは受身的な教育の中にも放射線教育が含まれていないことによる。

振り返ってみると、偶然放射線とかかわり、何度か医療と接するなかでついには医療に入り込むこととなった。教育面では医療分野を含めて放射線教育は今後より一層重要になると考えられるので、広く取り入れていただきたい。研究面では応用研究は重要であるが、基礎が無ければいつかは崩壊し、その基礎を海外にのみ頼るのではなく、大学はその本分としてバランスを考えて両面を追求されることを望むものである。

## 東海の海岸と係わりあった25年間

岩田 好一朗 (大学院工学研究科)



私の専攻分野の海岸工学は、昭和25年に誕生した新しい学問分野ですが、日本では昭和29年に、土木工学の1分野として海岸災害の防止を大きな目的としてスタートしました。昭和28年13号台風や昭和34年15号台風により伊勢湾・三河湾沿岸域で起きた悲惨な高潮災害を契機として、「海岸法」や「災害対策基本法」の制定、“伊勢湾台風モデル”による高潮計算や“三面張り工法”で代表される「海岸保全構造物築造基準」の制定などが昭和36年までになされ、以降海岸防災の科学技術が進歩してきたのですが、その伊勢湾を南に望む東山丘陵にある名古屋大学で25年間お世話になりました。そして、良き先輩や同僚および優秀な学生に恵まれたことは本当に幸せでありました。

名古屋大学に着任した1980年に、静岡県御前崎から三重県の熊野川までの海岸線を見てまわりましたが、黒潮洗う雄大な海崖、優美なりアス式海岸、広い砂礫浜、心を和ます白砂青松の海浜、底生生物の宝庫である泥質や砂質性干潟など実に変化に富んだ海岸でありました。また、伊勢湾・三河湾は、冬には多くの渡り鳥が群れ集い海苔ひびが彩なす光景を目にすることができ、春には至るところで潮干狩りが楽しめる豊饒の海として私の目に映りました。

そのうち、渥美表浜海岸、伊良湖海岸、白谷海岸、常滑沖の中部新国際空港人工島、名古屋港海岸、津松阪港海岸、伊勢西南海岸、宇治山田港海岸、五ヶ所湾海岸、長島港海岸、七里御浜海岸など遠州灘から熊野灘にいたる海岸の保全や海域環境と海浜変化などの諸問題に深く係わるようになり、それに伴い、前にもまして海岸によく足を運びました。1998年頃から、晩秋～冬～春の土曜日や日曜日を利用して、簡単な測量器具の入ったザックを背負い、潮の香を楽しみながら、

遠州灘海岸の浜名湖から豊橋や赤羽根を通り伊良湖岬をまわり三重県の神前岬までの三河湾・伊勢湾岸のほぼ全海岸線を自分の足で歩き、前浜の状況や海岸保全施設の老朽度を調査しました。1980年当時と比べますと、前浜が狭くなった海岸や老朽化の進んだ海岸保全施設がかなり増えていました。

海岸法が1999年に改正され、海岸保全の目的が「防護」から「防護、環境と利用の調和」に変わりました。このため、全国で海岸保全基本計画の見直しが始まり、私は、御前崎から湖西市を間接的に含み、愛知県豊橋市から和歌山県潮岬に至る全長約1,822kmにわたる沿岸の海岸保全基本計画策定の取りまとめ役を仰せつかり、時には市長や町長を交え、海岸文化、景観学、経済学、水産資源学、人文地理学、生物学や海岸港湾工学などの分野の方々および漁業協同組合連合会、観光・海洋レクリエーション関係協会・連盟、医療法人や自然観察指導員連絡協議会の方々と21世紀を展望しながら議論を積み重ね、2003年に海岸保全基本計画を取り纏めさせて頂きました。

25年間にわたる東海の海岸との係わりの中で、気になる1つは海岸侵食であります。東海の堆積性海岸の海岸線は総じて後退していますが、天竜川以西の遠州灘海岸の前浜減少と伊良湖西の浜の海岸侵食、熊野川左岸の七里御浜海岸の海岸侵食が特に目を引きます。これらの海岸の沿岸漂砂量が減少していますので、山地から海岸いたる流砂系での一貫した土砂総合管理を実効あるものにするための対策が取られることを念じてやみません。

最後になりますが、名古屋大学の今後の益々の発展をお祈りし、お世話になりました多くの方々にお礼申し上げます。

## さりげない先生の一言

河出 清 (大学院工学研究科)



大学に入って数学のレベルの違いと第二外国語があることに、新鮮さと大学生になったという開放感がありました。ある日、教養部の先生宅でケーキをご馳走になった折に、「少し背伸びして、競争しましょう」と先生がさりげなく言われました。大学の先生が新生生の自分をライバルと見て下さることに、高校とは違うと改めて感じました。

学生さんの考えていることや何気なく書いているグラフを背中越しに見てどきどきとする経験が多々あり、若い人が怖いと感じて過しています。先生は「競争して」をご自身に対し「気を張ってやっていこう」と気を引き締めるために言われたのではないかと推察しています。

努力すれば達成できるチャンスがあるから頑張らなう、とよく言われます。しかし、継続して努力できることが能力であり、頑張らただけでは越えられないものがあることを実感しています。それに、頑張らという言葉には知性と計画性および継続性がどうも希薄に感じられます。先生は私たちに、「少し背伸びして」を頑張る自分に安心しないで、いつも気を張って、新しいことに挑戦して行く「緊張感」を持ち続けてやって行ってください、と言われたものと思います。

これも教養部時代のことですが、弓道部の練習のとき、部長が「勉強ぐらいは自分でするものだね。落第生が試合に出ているのは恥ずかしい。」と私たちにさりげなく言われた言葉が心に残っています。そのせいかどうかは分かりませんが、落第生はいつの間にか退部するようになっていました。

9年前に弓道部OBとして部長をお引き受けいたしました。当時は留年生が試合に出ていましたし、成績も芳しくありませんでした。「勉強して下さい。もし留年すれば休部か退部して勉強するように。名大生は社会に出ればリーダーになることが期待されています。格好良く勝ちたい。」とお願いしてきました。初めの3～4年間は低迷していま

した。最近は男女とも7大学戦や東海学生リーグ1部で優勝もできるようになり、部員も増えてきました。「さりげなく」は話せない私ですが、聞き分けのよい学生さんにお付きあい頂き感謝しています。

体育会全体では部員の減少傾向が続いています。学業に身を入れる人の課外活動が、勇気ある知識人の養成にもつながるものと思います。あることを奨励するためにインセンティブを与えてはどうかという議論があります。しかし度が過ぎると高い志の人をかえって遠ざけることになるかも知れません。また、それ自体が好きでしている人に対し失礼になることも考えられます。セレクションで選手を集めている大学を相手に、一般入試の名大生が勝つことに爽やかさを感じています。

私の研究の大部分は、原子炉や加速器を用いた学外の方との共同研究として行ってきました。これらの大型共同利用施設が使えるのは、相当以前に先輩の先生方がなさった決断のおかげと感謝しています。学内においても同じように種々の決断がなされてきたことと推察いたします。今後も皆様が、将来から現在を見て、世界の中の名古屋大学として教育と研究で成果を挙げて行かれることを期待しております。そして、次の世代の方々にプラスアルファをつけて返していける社会システムの構築にも、頑張らないで気を張って、さりげなくやって行って下さることを期待しています。あのおときさりげなく言われた指導教官や部長先生のレベルに私は達しないかも知れませんが、せめて不熟ではなく未熟と言って頂けるようにはなりたいと願っております。

長年にわたり助けて頂きました、学生さん、事務および技術職員の方、先生方および学内外の共同研究者の方に感謝申し上げます。

## エネルギー有効利用最先端の 名古屋大学を期待する

菊山 功 嗣 (大学院工学研究科)



大学を1964年に出て2年半、民間会社でセールスエンジニアをした後大学に戻りました。研究業績ゼロの私を助手に採用して頂いた恩師に深く感謝しています。経済上の理由で大学院進学ができなかったのも、助手の研究生活は本当に楽しいもので、終電車の時間を気にしながら研究と勉強に集中できたと思います。1年に1～2回の学会発表と論文投稿のペースで、早いペースではなかったのですが、私の経歴を考え、先生もあまり急がすようではなかったと思います。余暇には野球やテニスを楽しむことができました。専門が流体力学であったので先生を交えて球技のボールに関する流体力学などについての議論は楽しいものでした。

大学紛争の時(1969)には職組の執行委員で、その年は本部が5月末に封鎖され、封鎖の拡大を防ぐために、職組では交代で泊まり込みをしていましたが、ちょうど私が泊まり込んでいた9月18日夜教養部の封鎖が起きました。これらの封鎖が解除されたのは12月末で、その年は全学が研究そっちのけで、大学をどのように守るのかで貴重な時間が費やされました。しかし大学は自らの手で守ると言う教訓はその後の大学運営にも反映されてきています。

1975年のオイルショックで研究の方向をエネルギー関係に向けたいと思っていたところ、三重大学の友人から、山形県立川町で風車をたてる計画に協力を依頼され、研究室やその周辺の古いパソコンを集めて、1年間フィールドでの風速データ収集を行なうことになり、これが現在でも研究室の風力発電に関する研究に繋がっています。この立川町は最上川が奥羽山脈から庄内平野に流れ込む入り口で、冬はもちろんのこと、夏も谷間を抜けて大平洋側からの強い東風が吹くところで、住民はこの風に悩まされています。推進委員会

ではこれを利用して発電し、それを電力会社に売る計画を立て、平成5年に100KWの風車3台を高台に設置しました。これが自治体がつけた風力発電所としてテレビで放送され全国の注目を浴びようになり、NHKプロジェクトXでも放映されました。その後も大形風車の設置をすすめており、京都議定書発効の現在、この町の風力、バイオなどによる電力自給率が60%以上であり、全国各地の自治体の模範となっているようです。

風車の研究では我が国はヨーロッパと較べて研究費が少なく、研究者層が薄いために、かなり立ち遅れているのが現状です。島国の我が国では洋上風車のサイトとしては豊富ですが、国は本腰を挙げる予定がなく、未だに大きなプロジェクトは立ち上がっていません。

一昨年から本学のエネルギー専門委員会の委員長をさせられ、夏の電力ピーク時の節電などを実施して学内の協力をいただきましたが、省資源、省エネルギーに関する各構成員の認識は低く、貴重な研究費が光熱費に充てられています。21世紀の名古屋大学に期待することは、優れた研究成果を生み出すことはもちろん、大学のエネルギー管理、利用についても全国の最先端を行く大学にしていだきたいと願っています。

## 雑 感

後 藤 俊 夫 (大学院工学研究科)



国立大学は、過去10年の間に、大学院重点化、評価の実施、法人化等、次々と国全体の大きな変化の波に洗われ、大学の教員は落ち着いて教育や研究に力を注ぐことが難しい状況が続いてきました。私も長年その動きに巻き込まれてきましたが、しかし、そのような状況にあるからこそ、教育や研究のあるべき姿について常に考えていくことが必要ではないかと感じてきました。そこで、ここでは、全く個人の自由な立場で、雑感として、研究に関することについて触れてみたいと思います。

大学における研究で最も重要なことは、学術的な基礎研究の推進であり、その研究成果を学術論文として社会に公表していくことです。従って、大学では今すぐ応用に結びつかない分野であっても、将来発展するかもしれない学術的な基礎研究の意義と重要性を認め、必要な場合は支援をしていくべきであろうと思います。

しかし、研究分野によっては、基礎的成果と見えるものでも、それが短時間で実用技術に結びつく可能性を持っています。特に、私が関係している工学系分野ではそういう分野が多くあります。そのような分野は、基礎的な成果をそれだけで終わらせることなく、その中から実用技術として応用できるシーズを見いだす努力を研究者自身が行うことは非常に重要です。折角実用化して社会に還元できるかもしれないシーズが含まれているのに、それを見逃すことは、研究者にとっても、大学にとっても、社会にとってももったいないことです。従って、研究者が学術的な成果を得たときに、少し視点を変えて、あるいは視野を広げて、特許となりうる成果はないか、実用化の可能性はないか考えてみることは大切なことです。そして、実際に研究成果が特許となり、さらにそれが実用化されることになれ

ば、その研究者の成果は、学術論文だけの場合に比べて、何倍にも何十倍にも広がりを持つことになります。特に工学系の研究者にとっては、自分の産み出したシーズが実用化されて社会に還元されていくのを見ることは大きな喜びだと思います。

私自身について言えば、研究生活前半の若い時代は、基礎的研究に関心がありましたが、教授就任後は、基礎に加えて、応用とか実用化にも関心を持つようになり、特許も自分で勉強して積極的に出願するようになりました。これは、私の関わったレーザーとその応用分野においては、基礎と応用が近い距離にあり、技術の発展とともに企業も基礎的成果を必要とするようになったことでもあります。私自身が、基礎だけでなく、応用的あるいは実用的研究の重要性を認識するようになったことが大きいと思っています。そして今振り返ってみると、若いとき基礎的分野に携わって知識と経験を蓄積し、その上で応用的分野に進んだことは、私にとっては大きなプラスだったと感じています。

研究者としての進み方にはいろいろなパターンがありますが、基礎的な分野からスタートし、その後応用や実用的分野に入っていくのは、研究に広がりや新しい展開をもたせるためにも、一つの比較的好い進み方ではないでしょうか。特に先端的分野ではそれが言えると思います。

以上、研究に関して私の勝手な経験や感想を述べさせていただきました。

最後に、名古屋大学の皆さんの今後の一層の活躍を祈念しています。

## 63年の節目にて

小林 一 清 (大学院工学研究科)



昭和44年4月に名古屋大学農学部助手として赴任して以来、27年間を農学部にて、その後9年間を工学部および工学研究科にてお世話になった。その前に18歳で大阪大学工学部に入学して9年間の学生時代を過ごしていることを勘定すると、18年間工学部にいたことになる。大阪で27年間、名古屋で36年間を送って、63歳を越えたところで定年を迎えたいま、ちょうど9の倍数で節目を経過してきた。

「あいだ」という言葉に共感をおぼえている。「あいだ」をキーワードにこの拙文を綴ってみたい。

工学研究科に幸いにも教授として呼んでいただいた時は、ちょうど工学研究科の流動型大学院システムの発足時期であった。萌芽的分野を開拓する複合専攻群としての物質制御工学専攻に本籍をおいて、伝統的な学問分野を展開する領域専攻群としての生物機能工学専攻を併担してきた。物質制御工学専攻は、省資源・省エネルギー・環境調和の課題にこたえて、新物質・新材料を創製する新たな技術体系の構築を目指す専攻である。生物機能工学分野は、化学の手法に基づいて生命の原理を解明し、その成果を工学的に応用することが使命である。格好良く言うならば、物質制御工学と生物機能工学の接点にあって、材料科学と生命科学の境界領域を開拓したいと考えて研究と教育に取り組んできた。このような環境に身を置くことができた幸福をまず感謝申し上げたい。

中心課題は「高分子と糖鎖のあいだ」である。糖鎖は、タンパク質や脂質に結合して、細胞内外における生命情報の伝達に重要な役割を果たしている。「糖鎖」の用語は、炭水化物の鎖を意味する魅力的な用語として、平成に入った直後に誕生した。ポストゲノム時代の今、糖鎖は生命活動をコントロールする機能分子として生命科学の最も魅力的な研究課題になっている。生体内糖鎖を、より高度な機能物質に仕立て上げることを課題として、医療や産業に役立つ高機

能材料を創り出すことを目指して研究を進めてきた。

糖鎖機能高分子材料を研究する過程で、学内はもちろん他大学および企業や公設研究機関も含めて、工学、農学、医学、薬学、理学系の多くの分野にまたがる方々と研究交流を進めることができたのはありがたかった。また、我が国は伝統的に糖鎖科学に強く、とりわけ名古屋を中心とするこの地区には優秀な研究グループが集まっておられる。機能材料分野は糖鎖研究の隅っこにあって細々と進めていたにもかかわらず、この地区をはじめとして糖鎖生物学および糖鎖化学の研究者から多くの手厚いご支援をいただいていた。

やや話を変えて、63年間の記憶をたどってみると、つぎのようなこともこの機会に記しておきたい気持ち強い。

昭和16年8月に生まれて、終戦時には4歳前であった。空襲の最中に防空壕でうずくまってB29の爆音を聞き、橙色の焼夷弾が雨のように降り注ぎ、一つが防空壕のすぐそばに落下して黄色い粘り液体を流して燃えているのを見た。戦争を記憶している最後の世代である。

昭和35年入学当時の工学部化学系学科の入学試験の最低点は、医学部の最低点より高かった。卒業時には帝人、東レ、三菱の化繊御三家が文科系理科系を問わず人気企業のトップであった。しかしほどなく石油ショックがあり、重化学工業の華やかなりしときが一挙に落ち込んだ。ちょっと先を見通すことの難しさを、同級生達は十分に思い知らされた。

私自身は名古屋大学にはお役に立ってはいなかったが、このように幸せな定年を迎えるまでに育てていただいたことに深く感謝しつつ、名古屋大学のさらなる発展をお祈り申し上げたい。一寸先は闇である。私としては心して次の節目に向かいたい。

# 名古屋大学金属学科と オックスフォード大学冶金学科

坂 公 恭 (大学院工学研究科)



私が名古屋大学工学部金属学科に入学した昭和35年、西暦1960年は日本にとっても名大にとっても大きな節目に当たる年であった。日本は敗戦の荒廃からようやく立ち直し、これに続く高度成長時代のスタートを正に切ろうとしていた。この年の7月に所得倍増の池田内閣が成立している。名大では豊田講堂が落成し、昭和34年度の卒業式(昭和35年3月)に続いて我々の昭和35年度の入学式が4月に豊田講堂で初めて挙行された年でもある。さらに名大祭も6月に第1回が開催されている。

第1回名大祭では名大オーケストラが豊田講堂で演奏会を開いた。その演目の一つにモーツァルトの「フルートとハーブのための協奏曲」があった。ハーブは高価で当時は借用が無理と言うことか(?)ピアノで代用された。名大祭後の反省 and/or 感想文集に、「やはりピアノでは強すぎてハーブで聴きたかった」という感想が載っていたのを思い出す。名大祭も今年で45回を迎えた。第50回の名大祭では是非、本物のハーブで「フルートとハーブ」を演奏してもらいたいものである。

ところで、私は入学以来、途中、1977~1979のまる2年間をBritish Council ScholarとしてOxford大学で過ごした以外は、学部、大学院はもちろん、定年退職に至るまで教官(員)の任期をすべて名大で過ごした。従って、私にとって大学とは名大とOxford以外には存在しない。いうまでもなくOxfordは世界でも最も古い大学の1つであり、片や名大は最も若い大学の一つであろう。名大は今年でようやく65周年を迎えた。Oxfordの何百年という歴史にはかなうべくもないが、名大は100周年が当面の最大の節目であろう。OxfordやCambridgeのアンティークの店ではmore than 100 years oldという保証をした印刷物collegeの絵などが売られている。しかし、考えてみればOxbridgeの古いcollegeも設立当初は新しいcollegeであったわけで、OxfordのNew Collegeというcollegeの入り口の石の階段はすり減っていて、雨の日など滑りそうである。New CollegeがNewであったのは13世紀であったのだという歴史の重みを実感させられる。

しかし、材料系の学科に限ると、Oxfordの材料学科(Department of Materials)の前身である冶金学科

(Department of Metallurgy)は1956年に合金に関する法則で有名なHume-Rotheryによって設立されている。我が(旧)金属学科は1939年の本学創立当初からの学科であるから、Oxfordよりも古い歴史を有しているのだ(私の講座(今は大講座制で研究グループと称している)は名大創立以来の講座で、私は3代目の教授で、初代の武田修三教授の最後の卒研究生であり、2代目の井村徹教授の最初の大学院学生である)。名大もあと10年で75周年のsub-peakを迎える。75周年を迎えれば待望の100周年は指呼の間である。これからの10年間は名大の真の伝統を確立するための勝負の10年であろう。皆様方のご健闘を祈ります。

入学当時の名大は、建物らしい建物といえば、工学部の1、2号館と経済学部のみで、あとは木造のバラックが散在しているのみであった。当時は、本山-名大の道路には八事層の赤土が露出しており、雨の日などは難渋を極めた。「名古屋大学(名古屋大学前ではない!!)」という自前の地下鉄の駅を擁し、高層の建物が建ち並ぶ現在の名大キャンパスが夢のようである。尤も、地下鉄は私の学生当時から計画されており、卒業までに間に合うことを期待していたが、あに図らんや、開通は遅れに遅れて定年退職に辛うじて間に合った。

只、IB電子情報館(旧工学部1号館)と経済学部との庭園(?)と工学部2号館と文学部との間の図書館の前の人工池にはいささか興ざめである。OxfordにはScience areaの前にUniversity Parkという広大な公園がある(材料学科はUniversity Parkの前で、住所はParks Roadである)。公園の奥の方には池があり、白鳥が飛来する。それ以外は見渡す限りの緑の芝生である。またそれぞれのcollegeの中庭も一面の芝生で覆われている(もちろん芝生は立ち入り禁止である)。IB電子情報館前の庭園らしきものと図書館前の人工池をつぶして、直ちに芝生のParkへの変更の要ありたい。豊田講堂と図書館を結ぶgreen beltが文字通り全面緑の芝生で覆われた風景を想像して頂きたい。日本でも有数の雄大な美しい芝生のParkをもつ大学になることは間違いないと思うが、いかがでしょうか。

## 考える学生に教育するために

正 嶋 宏 祐 (大学院工学研究科)



名古屋大学工学部に赴任して以来、11年があっという間に過ぎた。日米両国において受けた自分の教育研究体験から、学部学生に対する教育の重要性を痛感していたので、何か自分にできるかも知れないと喜んで名大からのオファーをお受けした。

量子化学と化学基礎Ⅰが主として担当した学部科目であった。学生には宿題も出し、学生が自分で問題を解くことで実のある教育をするつもりで努力したつもりであった。ところが、自分の講座に配属された学生に質問してみると、教育効果は全く感じられなかった。3年前の卒業式の日に、珍しく和装の女子学生から「一緒に写真に入って下さい」と頼まれた。卒業に際して感想を聴くと、「先生の化学基礎Ⅰを受けたときは一生懸命勉強をしたのですが、その後は簡単に単位がもらえるから勉強をしなくなりました」と言う。勝手な推測であるが、8割以上の学部学生にとって、学部1年から3年までの三年間が、学問的には「失われた3年間」となっておりそれが我が国の科学・技術における底力の弱さとなっているのではないかと考えている。

工学部化学系では、講師以上の全教員が分担して学生指導をしている。新生の成績表をみると、半期に17科目も受講している。単位の取得要件から、学生は講義時間の2倍の自習をすることになっている。15科目も受講すれば、15科目 / 週×1.5時間 / 科目×2 = 45時間 / 週の自習を必要とする。また、講義時間も考慮すると週に約70時間の講義・自習時間である。これでは集中して勉強もできないし、体がたえない。大学生活をエンジョイしたいと夢を膨らませて入学する学生の「夢」を裏切ることとなる。大学教育の重要な役割は、先人が、社会、自然、人間をどのように観察し、各学問をどのように理論化・体系化してきたかを、学生に学ばせ、「どう考えるか (how to think)」を習熟させなければならない。そこで、(1) 1～3年次の学生が、十分な自習時間を取って、読み、

考え、そして問題を解き、(2) 学生が部活等にも割くだけの時間的な余裕をもたせ、(3) 教員が講義に割く時間を短縮して教育と研究に割く時間を長くし、さらに、(4) 大学院生には経済的な援助をする、という具体的な目標を同時に満たすためには、次の手を打つしかないと考えている。

すなわち、(a) 週1回90分の授業科目をなくし、全てを週2回90分授業(将来的には、週3回60分授業の方がよい)の科目を標準とする。この講義科目をもって4単位とする。(b) 学生の受講科目数が通常4科目で、最大5科目とし、(c) 各科目に実験と演習時間の一方または両方を併存させる。(d) 各科目に週に1回の宿題は課し、1回の中間試験は行う。(e) 選択科目を極力削減し、教員の教育負担を軽減する。(f) 十分な自習をすれば理解できる教育を行うが、厳密な成績評価をする。(g) TA (Teaching Assistant) による教育補助を十分に活用する。ただし、必要なTA経費を確保する。それは経営努力で可能である。その他の項目は省略する。カリキュラム改革を通して、より高度な学問へ進むための十分な準備を学生にさせる。その上に、卒業研究や大学院教育が乗るのである。

ある高校の先生にこの考えを話したら、「早くそのような教育をしてほしい。そして、高等学校で、高校生にどのような教育をしてほしいかメッセージを發して頂きたい」とのことであった。我が国は、まだ潜在力を持っている。大学生が「失われた3年間」を「実のある3年間」とし、「いかに考えるか」を学ぶことができれば、将来は明るい。

最後に、様々な側面で、多くの事務職員と技術職員の皆さんには助けて頂いた。大学の使命に寄与したいと真面目に願っている職員の方々の知恵を結集することができれば、必ずや大きな力になると信じている。名大での11年間で、他所では得難い体験をさせて頂いた。皆さん、本当に有難うございました。



# 応用物理学と電子物性論の研究を ふりかえって

水谷 宇一郎 (大学院工学研究科)



応用物理学科の4年生に進学して私がいただいた研究テーマは貴金属合金の電子比熱測定の研究であった。3年生の終わりに研究室配属のために行われる研究室紹介の時間に量子力学を基礎におく実験研究がしたいと申し出て岩間義郎先生に勧められ卒業研究を始めた時のことである。岩間先生ご自身は磁性がご専門であったが私が量子力学にこだわっていたため助教授の野口精一郎先生のご指導を仰ぐことになったのである。岩間研で修士そして博士課程と進んだが、電子論のバイブルとも言うべき Mott and Jones の Properties of the Theory of Metals and Alloys や Ziman の大冊 Electrons and Phonons を当時豊田理化学研究所に在籍された武内隆・島田壽両氏そして研究室の後輩松尾進氏(名大情報科学研究科教授)と勉強した。また、米山昶夫氏(新潟東芝セラミクス社長)とは Ziman の Principles of the Theory of Solids を勉強した。その後、Ziman の Elements of Advanced Quantum Theory など Feynman diagram や Green 関数まで勉強したことが楽しい思い出となっている。この時代に仲間と電子論のゼミに励んだおかげで私の電子論の基礎が出来たと信じている。

電子比熱測定の実験が縁で1969年に Mellon Institute の Massalski 教授の研究室で実験をする機会に恵まれた。半年間であったがアメリカの研究室での研究は刺激的であった。一旦帰国して名大で学位を取得後、1972年より postdoctoral fellow として Massalski 教授の下で研究を本格的にスタートした。1975年10月まで3年半ほど Massalski 教授から電子論だけでなく合金の状態図や相安定化機構に関する幅広い学問を吸収することが出来た。金属電子論の分野で Hume-Rothery 則は特定の構造の合金相が特定の電子濃度で生成する経験則としてよく知られている。Hume-Rothery のお弟子さんである Raynor に学んだ Massalski 先生からイギリスの冶金学者が1920年代から取り組んできた Hume-Rothery 則に関係した歴史ある学問を直接学べた幸運に感謝している。金属材料の研究は量子力学に基づいた電子論だけでは不十分で多元系の熱力学と状態図の知識が不可欠であつながら世界的に両刀使い出来る研究者が少ない事実を知ってこの分野こそ自分が挑戦する道ではないかと悟ったのは30歳を過ぎたこの頃のことであった。

偶然にも卒業した研究室から助手ポストのオファーがあり、1975年末に帰国した。名古屋大学に復帰後、岩間先生から

多元系の物理を研究することと金属学会へ入会することを勧められた。それは私が Massalski 先生から学んだ材料熱力学の勉強と合致した。私が選んだテーマはアモルファス合金の電子論であった。1980年代に入ると高温超伝導体、準結晶が発見されたが私はこのいずれとも深く関わりながら名大における研究生活を過ごしてきた。振り返って見ると私は多元系の材料を使って電子物性の研究をしてきたことになる。現在、物性物理学の大きな柱となっている高温超伝導体の研究はそれまで物理屋さんが避けてきた多元系の物理そのものであるが現在では多元系とか希薄系とか意識することもなく若い研究者が多元系物質に取り組むようになっているのは喜ばしいことである。

私は自分の研究人生を別の切り口で見ることがある。それは応用物理学との関わりである。基礎物理と応用物理はどこが共通で何が違うのかという議論を繰り返してきた。私は今も Hume-Rothery 則の背後にある物理の探究を第一の研究テーマとしているがこれは基礎的ですがすぐに実用に結びつわけではない。しかし、並行して応用超伝導の分野でバルク超伝導体を着磁して得られる超伝導永久磁石の研究とそれをマグネトロンスパッタ装置に搭載してこれまでにない高品質の多層膜や透明電極膜を成膜する研究を行ってきた。この研究は民間企業との共同研究でもあり極めて応用色が強いと認識するものの超伝導現象に関する電子論の基礎が不可欠な分野である。さらに熱で音波を励起しその音波を使って冷熱を発生させて音波冷凍機を作る研究をこの5年程かけて立ち上げてきた。熱音響物理学は平衡系の熱力学ではなく定常流の熱力学でありその基礎学問の確立から応用研究に魅力を持たえた学問領域と感じている。私が関わってきた分野はいずれも量子力学、統計力学、電子論、熱力学など物理の基礎をしっかりと身につけることが不可欠でありその上で常に原理に立ち返って本質を見通す力を磨くことで本格的な応用研究の花が開くと信じてきた。この信念こそ私が目指してきた「応用物理学」ではなかっただろうか。幸いにもそれぞれの分野で後継者を育てることが出来たことは「応用物理学とは？」と問い続けてきた命題に私なりの答えを提示出来たのではないかと誇りに思っている。

最後に、学生時代を含めて40年の永きにわたり名古屋大学で恵まれた研究環境をいただき自由に研究と教育に従事出来たことに厚く感謝をいたします。

## 名古屋大学教官としての36年をふりかえって

水谷 照 吉 (大学院工学研究科)



「光陰矢の如し」。1969年名大の助手に採用されて早や36年が過ぎました。この間、名大教官として、研究・教育の仕事を楽しく続けることができたのも、本学の関係者（現役およびOBの教官、スタッフならびに学生諸氏）の暖かいご支援によるところが大であり、心から感謝の意を表させていただきます。1960年に名大・電子工学科に入学し、大学院を終えるまでの9年間の学生時代を含めると実に45年となり、感慨無量です。

今でもよく憶えています。60年安保の年に名大に入学し、入学したその日から、安保騒動の嵐に巻き込まれ、連日のクラス討論、学生大会、授業放棄、街頭デモ行進、機動隊との衝突等々の日々が続きました。静かな三重の田舎からやってきた新入生の私には、大きなショックでした。また、大学院を終える年は、大学紛争の真っ最中で、名大も大学封鎖、大衆団交等々で大学全体が大混乱でした。大学が社会や国際問題とも密接に絡んでいることを思い知らされました。逆に言えば、このお陰で、電気・電子工学という専門分野の勉学のみならず、幅広く政治、社会、国際問題に目を向けることができるようになり、「専門バカ」にならずに済んだことは、まさに「災い転じて福となす」です。

1960～1990年代は、日本経済は右肩上がりの成長期で、「理工科ブーム」の最中であり、名大にも次々と学部、学科の新設が続き、私の所属する電気系でも、1958年電子工学科、1967年電気工学第二学科、1982年電子機械工学科、1985年情報工学科が新設され、教官や学生の数もどんどん増加していきました。また、学生の就職戦線も絶好調で、優秀な学生がどんどん集まってきたよき時代でした。私も、この波に乗っかり、新設電子工学科の第2回生として入学、そして新設の電気工学第二学科の助手に採用され、今日に至っています。

大学院時代は電子工学科半導体講座に所属し、半導体Siに関する研究で学位を得ましたが、卒業と同時に、故家田教授の研究室に移り、有機新素材の開発と応用に関する研究を始めました。この頃から、電力分野も送電電圧の

高電圧化が急ピッチで進められ、有機新素材を応用した電力機器・ケーブルの小型・高性能化の研究が産業界・大学で活発に行われました。われわれの基礎研究も随所に生かされ、この分野の日本の技術力を世界のトップに躍進させるのに少なからず貢献ができたと思っています。最近、有機材料を用いた有機エレクトロニクス分野が注目され（例えば、薄型有機ELフルカラーディスプレイの実用化）、次につながる研究分野が立ち上がりつつあります。かかる意味では、運よく時代の流れに後押しされ、楽しく研究をすることができたと言えます。

また、名大を足場にして、海外の大学、産業界に多くの友人ができました。かかる人的つながり先研究を推進する上で大変役立ちました。海外の大学のConsulting professorやVisiting Professorとして、欧米や中国、韓国で学生を指導する機会にも恵まれ、日本の大学の状況を別の角度から眺めることもできました。一寸と残念ですが、学生の勉学・研究意欲や教官の教育に対する準備と熱意は、日本の我々より先勝っているように思われます。会議や雑用にかなりの時間と精力を割かざるを得ない日本の状況の中で、教官の準備不足の授業や研究指導が学生の勉学意欲の減退をもたらしているとすると大問題です。私が関係する電力やエレクトロニクスの分野でも、世界のトップに君臨した日本の技術力が韓国や中国に追い抜かれそうで、雑務に振り回されて人材の育成という本務がなござりになりかかっている事に大きな不安を感じています。

ここ10年は、日本経済の不況ともあいまって、学生数の減少、学生の学力低下、大学の定員削減、大学改革という名目での会議と雑務の急増等々、大学はまさにピンチの時期にあります。この時期に大学を去るのは何か心残りの気もしますが、この停滞期が次の飛躍的発展の準備期間であることを強く願っています。

最後に、定年まで本学で楽しく過ごさせていただいたお礼申し上げるとともに、名大の今後の発展と関係各位のご活躍をお祈り申し上げてペンを置きます。

## 私が最近思うこと

近藤 忠雄 (大学院生命農学研究科)



定年退職を迎える1年前に国立大学は独立法人化し、大学の研究者のものの考え方が短期的に見掛け上の成果のあがることにばかりに関心が行き、10年、50年先のことにほとんど思いが及ばないようになって来ているのではないかと危惧している。私は30年間花の色発色の仕組みを化学的に明らかにしてきました。赤から青色の花の色素のほとんどがアントシアニンによるものである。僅かに6種類の発色団でなぜ多彩に発色ができるのかは前世紀の初めから議論になっていた。この色素は、リトマスのようにpHによって酸性で赤、中性で紫、アルカリ性で青色となることから、pH説が当時のノーベル賞化学者のWillstätterによって提出された。これに植物生理学から堂々と反論し、金属錯体説を唱えたのが柴田桂太先生で、この遺志を継いで林幸三先生は、自ら実験に携わり、実に30年後にその証拠をツククサの青色色素に見出された。それを故後藤俊夫先生と私共で最終的に、高精度なX線結晶解析によって、金属錯体説を証明し、青色を発色する分子種を明確にすることができた、この間、20余年の歳月を費やした。さらに、青色アサガオの発色の研究から植物生理学の常識を覆して、やはりpH説も正しいことを明らかにしてきた。これらの研究の成果は、長い年月研究を支えるシステム(目先の業績に踊らされない研究システム、良い意味での講座制)があったことで、恵まれなくても、諦めないで粘り強く努力できたことはこのことによるものである。

研究費を分捕ってきて若い研究者の卵を雇って、知力、業績を吸い取って自分の成果にして地位を向上、経済的な安定化を得ようとする傾向の強い現在、私が、先生、先輩の中に本当に尊敬し、偉いと思う人がいた。研究そのものが真から好きで、常に、実験室にいて自

らの手で研究を進め、ものになりそうになると学生やお弟子さんにその研究テーマを譲り、また新たな研究に自ら挑戦する、些末な部分の科学を知らない上に、講義があまり上手とは云えない、今風に云えば学生評価が落第点であるが、後からその偉大さを知る先生がいた。理想は高いが決して自らを飾らず、職人の親方のような風体で後ろ姿から学生を研究指導する、現在では、この種の人は絶滅品種に属する。一方、現在、研究教員の中で、研究には信念がなく、風見鶏(2世代以降の政治屋)のように、状況を見ながらそつなくこなすテクノラート型の研究者像が蔓延している。中堅をなす研究教員のなかには、一見羽振りの良く効率的かつスマートではあるが、よく見ると研究のイミテーション、ごまかしに限りなく近く、言訳が多いのが見られる。ある意味ではかわいそうであるが、当人は気付いていない、これは不幸なことである。ここからは、将来を托せる若い研究者が生まれにくい。我国の将来を考えると薄ら寒くなる。研究を主とする大学では、2から3割程度、ホアグラにならない程度の研究費で、短期間で成果を求めないで自らの手で、創造的な研究持続できる体制を早急に作る必要があると考える。そのためには、これだけ研究者が忙しくなると正当な評価が難しいので、研究指向大学に、時代に迎合(すぐの要請)するのではなく俯瞰的かつ深く将来を見通せて、さらに、教養教育ができるプロの人材を養成して、厚遇で処遇することも必要と考える。フラスコを振ることが必ずしも好きでない人のなかにもこの任に向いた人もいると感じている。

このようなことを自由に云えることこそが本来の大学であり、この中に居らせて頂いたことをこころから感謝いたします。

## 出会い

宮田 正 (大学院生命農学研究科)



昭和35年4月に名古屋大学農学部に入學、大学院博士課程を満期退學後、昭和44年4月農学部害虫学講座の助手に採用されて以来、米国州立ウイスコンシン大学での客員研究員としての1年間、タイ国カセサート大学でのJICA 専門家としての半年間、ジャマイカ国西インド諸島大学でのJICA 専門家としての1年半の計3年間を除いた、42年間を名古屋大学で過ごしたことになる。

子供の頃より、植物採集を趣味としていたため、大学で昆虫学を専攻しようとは夢にも思わなかった。昆虫学を専攻するようになった背景の一つに、教養部で空き時間に受けた高岡実先生の生物(動物学)の講義が影響していると思っている。専攻した害虫学研究室では、当時殺虫剤抵抗性機構の研究が盛んに行われていたが、私自身は殺虫剤の作用機構に関する研究をテーマに選んだ。その後、社会情勢を反映し、研究テーマも昆虫と哺乳動物間での選択毒性の研究から、昆虫種間、害虫と天敵との選択毒性に関する研究に進化した。

ウイスコンシン大学から帰国後、研究室の齋藤哲夫教授を通じ、殺虫剤抵抗性イネ・ウンカヨコバイではアリエステラーゼ(AliE)活性が高いことを発見した農林省農業技術研究所の尾崎幸三郎博士から、共同研究の申し込みがあった。その後、ツマグロヨコバイのカーバメート剤抵抗性機構として、アセチルコリンエステラーゼ(AChE)の感受性低下が昆虫で初めて報告され、この現象の発見者である農水省農業環境技術研究所の岩田俊一・浜弘司博士との共同研究もスタートした。これら学外研究者との共同研究によりAChEの生化学的性質の解明や、共力剤や複合剤の利用による抵抗性打破、抵抗性害虫の生化学的特性を利用した

簡易な抵抗性モニタリング法を開発できた。

その後、日本農業の状況を反映し、昭和55年頃より抵抗性の研究はイネの害虫からコナガ、ダニ類等、イネ以外の害虫に移った。その後、コナガの抵抗性研究では、有機リン剤、IGR 剤、Bt 剤、ネオニコチノイド剤等、各種殺虫剤の抵抗性研究に進展し、帰国留学生とのタイ国カセサート大学及び農業局との8年間に渡る共同研究に発展した。

平成になってからは、殺虫剤抵抗性発現機構の研究は、分子機構の研究に重点が移り、抵抗性研究で最初に手がけたヒメトビウンカの高AliE活性は、20年振りに遺伝子重複によるものであることが、また、高AliE活性の殺虫剤への抱合作用により、殺虫剤の解毒作用として働いていることが明らかとなった。また、ツマグロヨコバイのAChEの感受性低下は、点突然変異ではなく、ace2 遺伝子によることが、ピレスロイド抵抗性コナガやシロイチモンジヨトウでの作用点感受性低下は、電位依存性Naチャンネルの点突然変異によることが明らかとなった。また、分子機構の研究は、逆相関交差抵抗性を示す殺虫剤の発見や、抵抗性遺伝子の簡易モニタリング法の開発につながった。最近では、天敵の殺虫剤抵抗性機構の研究も手がけるようになり、将来の害虫管理への利用法を期待したい。

この様に自分の研究を振り返ってみると、その時その時の人との出会いによって大きく影響を受けてきた。これらの人々をはじめ、共同研究者としての専攻生、客員教授・研究員等、全ての皆さんに感謝申し上げる。永年お世話になった名古屋大学の益々の発展を祈念する。

## 研究・教育生活を振り返って

山根 恒 夫 (大学院生命農学研究科)



名古屋大学には1982年に農学部食品工業化学科(当時)「生物反応工学」講座の助教授として赴任し、爾来23年間お世話になった。教授になって数年後の学部改組の折りに、分子レベルの生物工学の重要性と将来の発展性を考えて講座名を「分子生物工学」に変えさせていただいて現在に至っている。

名大着任前のことに遡ると、私立大学工学部の助教授を3年、さらにそれ以前に他の国立大学の工学部化学工学科の助手を13年勤め、さらにその前は工学部工業化学科の大学院修士課程の学生であった。研究室に入った22才からおよそ40年間研究生活を送ったことになる。学生時代から名大助教授まで5名の教授に指導を受けた。その経験から思ったことは、研究というものとはたとえ工学的研究であっても真理の探究であるから誰がやっても同じと思われ勝ちであるが、実は研究の考え方や進め方や成果のまとめ方にその教授の個性が強く表れるということである。この思いの延長として、自分が教授になってから14年間、自分の個性が若い共同研究者にどのような影響を与えてきたか定かでない。

さて、助手時代は化学工学科に属していたこともあって、教授の先生に工学的センス(engineering sense)を教えていただいた。この時期は20歳台後半から30歳台前半であったので、「バイオによるものづくり」と「工学的センス」という研究のスタンスが形成され以後ずっと続いた。いろいろな研究テーマを手がけたが、大きく分けると「微生物の培養工学」と「酵素工学」と「応用分子生物学」の3分野となる。「微生物の培養工学」分野では流加培養の研究を行った。この培養操作法はそれ以前から知られていたが、工学的に体系化されていなかった。私共は流加培養に対し

て fed-batch culture という英語をあて、1973年に英文の論文を発表した。これが流加培養の工学的研究の嚆矢であって、その後多くの研究者が手がけて世界的に定着することとなった。「酵素工学」分野では酵素を用いた有用脂質類の合成を研究した。脂質類は水に不溶であり、有機溶媒に溶解して反応させることが多く、また当該脂質が液体の場合は無溶媒系で反応させるのが良い。そこで、有機溶媒系や無溶媒系の酵素反応に関して工学的研究を行った。これらの系の酵素反応において、微量の水分が触媒活性に強く影響することを発見し、「微水系(microaqueous system)」なる用語を提唱した。この概念は現在広く世界で認められている。

さて、教授になって、何か新しいことを、それも遺伝子に関係することを研究したいと思い、「無細胞蛋白質合成」の研究を始めた。これは私にとってはかなり難しいテーマであったが、幸い若い人達の協力が得られて、いくつかの成果を上げることができた。大腸菌由来の抽出液が非還元状態でも翻訳活性を示し、ジスルフィド結合を持つ蛋白質が生理活性を保持した状態で合成できることを明らかにしたことなどである。協力してくれた若い方々にお礼を申し上げる。

教育面では、農学部で「生物工学」の科目を長く担当したが、その教科書としても使った専門書「生物反応工学」の初版を38才の時に出版し、以来時代の進歩に合わせて内容を充実させ還暦に第3版を出版した。中国語と韓国語の訳本も出版されている。

最後に、23年間自由な環境で研究に専念させていただいた名古屋大学に心から感謝するとともに、名古屋大学がますます発展するよう祈念いたします。

## 想い出は尽きず湧きくれ

小栗友一（大学院国際開発研究科）



私は赴任してから39年間名大に勤務した。勤務というような言い方では不十分で「生活」してきたと言うべきかもしれない。東京での学生生活を終え24歳でここに来て63歳の定年まであまりに多くのことを体験した。過去を振り返ると書きたいことがどこからともなく湧きだし脳が破裂しそうである。頭蓋骨は何とか持ちこたえてくれている。特にお世話になった方々のお名前を書くだけで紙幅を超えてしまうだろう。

39年の間に所属は教養部から総合言語センター、言語文化部、大学院国際開発研究科と変わった。しかし、教育の重心は変わらなかった。ドイツ語である。私は天性のドイツ語教師である、そう見られたい 特に学生から と願ってきた。しかし、こちらの熱意が空回りしたときもずいぶんあったにちがいない。それでも、少なくとも自分としては教育を楽しんできた。特に、どのような材料を提供してどのように教えようかと考えながら準備することが楽しかった。授業にドイツ語の歌を取り入れた。最初の授業では「ブンブン蜂が飛ぶ」、最後の授業では「さらば、さらば故郷よ」のドイツ語版を歌った。自ら歌い、歌詞の説明の後歌唱指導するのである。よく恥ずかしげもなくそんなことができるねと、と言われたこともある。しかし、私は、歌が下手だからと言って赤ん坊に子守歌を歌わない母親があるだろうか、と反論した。もっとも、名大での文字通り最後の授業では得意の美声（？）を響かせて、「さらば、さらば故郷よ」のドイツ語版「ムシデン」を歌い通すことはできなかった。Stuckenschmidt, Stübig, Deeg, von Heuduck, Peters さんらの外国人教師と親しくなれたことも、ドイツに留学できたのもドイツ語教育のお陰である。

大学院では文学研究科独文で中世文学作品講読を

行った。一字一字丁寧に読みその後談笑するのが楽しかった。国際開発研究科ではグリム童話を読んだ。ここでも受講生は少数で、研究室で授業をした。留学生もいて授業に続くお茶の話題もいろいろで賑やかだった。

研究はドイツ中世文学、とりわけヴォルフラム・フォン・エッセンバハが中心であった。名古屋大学では加倉井先生、伊東先生、馬場先生がヴォルフラムの翻訳に取り組んでおられ、その研究会の仲間を迎えられたことが大きかった。毎週90行を訳す作業が楽しかった。解釈が分かれるときは、最年長の加倉井先生と最年少の私が同意見、中間の伊東先生と馬場先生が同意見という場合が多かった。

タイトルと冒頭に書いたように想い出は尽きない。良い想い出ばかりである。4年間言語文化部長の責務を曲がりなりにも果たし、定年前の3年間教養教育院言語文化部門長・同評価専門委員会委員長をそれなりに務めることができたのも、周囲の素晴らしい支えがあったからであり、良き同僚と有能な事務の方々に恵まれたことを幸福、幸運に感じている。最後に、最近始めてたちまち師匠（臆面もなくこんなことを書いて失笑されそうですが）呼ばわりされた川柳で思いを述べると、

想い出は美しく（芭蕉翁の「旅に病んで夢は枯れ野を駆けめぐる」をベースに）

定年に 夢は花野を 駆けめぐる  
しかし名大を去る寂しさに

目覚めれば 涙の川に 浮く枕  
39年間楽しい生活を送ることができました。  
名大ありがとう。

名大万歳！！

# 退職にあたって

長谷川 勝 夫 (大学院多元数理科学研究科)



## 1 はじめに

名古屋大学が多元数理科学研究科を立ち上げた10年前、それまで長くいた東北大学から転任して来た。以来、炎熱の夏の天候や数学者という慣れない人間関係に心身ともに翻弄され続け、あっという間に退職の時となった。しかし、振り返って見直すとそこにはいくつかのハイライトがある。その中からいくつかのエピソードについて手短かに述べてみようと思う。

## 2 殺人事件で学んだこと

名大に来る早々、何回も裁判所に通うことになった。私のゼミの学生が初日に顔を出さず、他の学生に聞いたら交通事故を起こして隣に乗せていた学生が死んでしまったとのこと。弁護といっても子を亡くした親御さんの気持ちを考えると複雑この上もなく、楽しい管のドライブが検察から殺人犯と呼ばれらることになる交通事故が身近にあることの恐ろしさや事故防止のための教育について考えさせられたことであった。

## 3 多元の理念と数学者

世の中の大学から数学の名前が消えて数理学とか数理科学となってしまった。以前は素粒子物理学を専門にしており、名大に来る頃は情報数理や脳型コンピュータを研究の対象にしていたが、もともとは中学、高校とも数学の先生に可愛がられて数学者になろうと思ったくらい、数学に興味があり、多元に来てからは世の中にこれほど素晴らしいところはなと思いました。しかも多元には数学ばかりでなく経済や教育や生物物理などの専門家がおり、好奇心をそそる話題がたくさんあった。しかし世の常で、数学の世界も一匹狼はもはや通用せず、一部の集団の前に民主主義の名のもとに干される運命にあった。異常な興奮や陰謀などを目の当たりにするにつけ、自然観察の体験が心理学の分野の人間観察に役立つとは望外の幸運であった。政治の世界に談合や根回しがなくならないのは民主主義に落とし穴があるため、それが分かるとも多元の運営に関する参加の仕方を考え、見張るだけに自分の研究に専念するようになった。毎年夏に行われる数学コンクールにおいて「問題作成委員長と名」コンクールの理念に立って、問題の作成に関して学校の先生方とどうしたら中学生に健全な数学の楽しみを味わって貰うことができるか議論した。さらに答案を採点すると、いくつかのエレガントな考え方に会えた。表彰式で直接本人や親御さんに来て教育や家庭環境を伺って納得し、将来も明るく感じられたし、脳の研究にとっても大収穫であった。

## 4 スポーツや音楽の交友

経済の先生が退職される際ゴルフを企画した。言い出したもののあまの下手さにその理由を本気で考えた。力学を応

用し理論を作ったものの全部はうまくゆかず、身体知の問題に到達した。つまり、自分が意図した体の動きが他人に見てもらおうと意図したようにはなっていないのである。一方、音楽においてもピアノやヴィオラを弾く機会があり、しかも大勢の前で半ば公的に演奏することになったときは、さすがにビデオで録画し、家人にも見せて意見を言ってもらい素直に聞くようにした。そして、何事においても先ず初めにコツを知っている優れた教師に出会うことが腕前を上げるためには絶対に必要であることを漸くして学んだ。それとともに、テニスにおいても、留学生を始め多くの初心者に手ほどきをするようになったが、年を重ねるほどプライドが高くなり、それが学習を妨げる主な原因となることを突き止めた。併せて、スポーツや音楽が心身の健康を保つために欠かせないものである理由も分かった。これらの交友関係はおそらく快感を得るものとしてお金では買うことのできない最高の宝物である。

## 5 大詰めの脳の研究

資料によると99年にスタンフォード大学で数学的認識論 (Mathematical Epistemology) と題して対象の認識から自己認識に至る脳のモデルについて話している。これらはその後、米国以外にもオーストリアやスウェーデンやベルギー、イタリアさらに中国でも話をしているが、実証を伴わない理論的モデルとして権威主義のプライドの前では、一切無視されたように感じた。しかし一方で、多くの人々の興味を集める話題であることは明らかであった。結局、倫理の問題に落ち着くのであるが、知性の研究には、順序だった論理的思考が必要で、ここに数学の偉大な価値がある。ただし現実には、この価値を学生に教えられる人がいなくなっている。先日行った最終講義では、プライドを刺激しないように配慮した問題を配った。哲学の基に数学があること、謎を解くことがどれほど楽しいか、などを確認してもらおうが狙いである。

## 6 おわりに

最近の研究結果を踏まえた感慨は、人ほどこまでも動物的でありそれを自覚するからこそ、動物的でなく脳心に振り舞う努力をする。これが精神活動の動機であるが、脳に反映するには幼児期の躾や教育は勿論のこと、胎教にまで遡ることが判明した。そのため、数世代に亘る文化と教育による妊娠期の母親の自覚の意識の変化が絡んでいる。従ってそれをサポートする家族や教育に関わる教師や教師役となる人との出会いが重要になる。しかし殆どの場合、それが確率であることからしばらくの間は、多様性に寄与すると前向きに考えることを提案して結びとしたい。(2005年2月22日記)

## 異端の情報理論研究

井原俊輔 (大学院情報科学研究科)



私の研究室がある情報文化学部棟(旧教養部棟)の新築工事が始まったのが名古屋大学に入学した頃だったと記憶している。年月が流れ、私は定年を迎え、この建物は老朽化がすすみ今やすっかすっでしまっている。一日も早い改修をお願いしたいものです。

大学院で確率論を専攻し、博士課程に進学した頃から、確率論の情報理論への応用に関心をもち始め、結局、情報理論がその後の30数年にわたる私の研究の中心テーマとなった。情報理論は情報伝達の諸問題について議論する数理理論である。情報伝達は基本的に工学の問題であり、情報理論の研究者の大多数は工学部あるいは企業の研究者で、私のような数学者は情報理論の世界では異端に属しているといえる。ハード面も含め実際の情報伝達について学び、情報理論がどのような問題を扱うかを学んでいくのが、普通の情報理論研究へのアプローチである。これに対し、私の場合は実際の情報伝達についての知識はゼロで、たんに、情報理論に確率論に関連して興味がある話題があるから、との理由だけから情報理論の世界に踏み込んでいった。振り返ってみれば、このような異端的アプローチが私の研究の長所となっていたかも知れないし、情報理論研究の枠組みを広げるのに多少なりとも貢献できたとすればこのことが最大の要因であろう。

最初の10年くらいは、もっぱら確率論的な関心から情報理論に取り組み、工学関係の情報理論研究者との交流も全く無かった。その後、研究集会などを通じ工学の情報理論研究者と接触するようになったものの、最初の頃は議論がなかなか噛み合わずもどかしい思いをすることが多かった。今にして思えば、使っている専門用語は共通していても、その用語に対して抱いている直観的イメージがかなり異なっていた。このような状況を抜け出すには、研究集会といった正式な場のみならず、コーヒーを飲みながらの

談笑、温泉につかりながらの雑談などが有効で、徐々に工学の情報理論研究者とスムーズな議論ができ研究協力関係ができるまでになってきた。しかし、それには10年という歳月を要したように思う。最近でこそ、学際研究とか文理融合といったことが叫ばれ、そのためのシステムが構想されつつあるが、学際研究の成果を挙げるためには少し長いスパンで物事を考えていく必要があると実感している。その点、学際的な研究をも初めから視野にいれている情報文化学部、情報科学研究科の卒業生、修了生にはおおいに期待しているところである。

学生、院生として6年半、工学部助手として1年9ヶ月お世話になったところで名大を離れた。その後、再び名大の一員になろうとは全く予想もしていなかったのが、およそ20年経った1989年に教養部に籍をおくこととなった。このとき考えたことは、ここで落ち着いて研究ができるということで、不覚にも、教養部が廃止に向かって動き出していることは全く知らなかった。結局、自分の思惑とは裏腹に組織改編とともに16年間を過ごし、人間情報学研究科、情報文化学部、そして情報科学研究科の設立に付き合うこととなった。組織改編には相当なエネルギーが必要であった。そんな中であって、私の周辺の数理グループの面々は、一番肝心な研究・教育にエネルギーが注げるような雰囲気作りに協力してくれました。このことには本当に感謝しています。

最後の1、2年は大学法人化の波とも重なり、法人化には大変なエネルギーを消費する作業が積み重なっていることも実感させられた。無駄なエネルギー消費を極力避けつつ、法人化のメリットを生かし、名大が名大らしく発展していくことを願っています。



## 風来疎竹。風過而竹不留聲。

峯村吉泰（大学院情報科学研究科）



3年ほどの会社生活を経て大学に戻り、本学工学研究科博士課程に入学してから、はからずも本学に36年お世話になった。この間、多くの方々にご厚情を賜り、好きなことに没頭できたことを心から感謝している。

研究への想いは、故大路道雄教授が流体力学の講義を通して示された学門全般にわたる深い学識に魅せられたことが契機であった。その折の教科書の前書部分冒頭に小さく掲げられていた表題（菜根譚からの抜粋）は、その後も絶えず私に問い掛け続けてきている。

本学では、村上光清先生（機械工学科）のもとで気液混相流時のポンプ性能に関する実験で研究指導を受けた。当時、混相流という語がまだ一般的でなく、国際会議では研究目的をいづかる質問を受けるほどであった。厳しい研究指導を受けたお陰で、学位取得後は助手として主体的に研究に当たれるようになり、新たな研究手法の開拓や試行錯誤を繰り返しての研究の進展に魅せられ、研究が面白くて仕方ないという青春時代を過ごした。学位取得後、親戚講座の教授で当時工学部長であった古屋善正先生に結婚式列席のお礼でお会いした折に、「奥さん、我々の研究にノーベル賞を期待しても、賞がないですから、期待しないで下さい。」と柔らかな笑みを浮かべてお言葉を掛けて頂いたことを思い出す。この一連の研究は、後にウィルソン教授（MIT）から原子炉安全解析に大いに参考になったと高い評価を頂戴した。彼は、後に、ロボットコンテストを主催し、日本にもブームを引き起こした御仁である。また、実現はしなかったが学術審議会が名古屋大学への「混相流研究所」の設置を勧告し、その構想の中に私の研究分野が位置付けられていた。このような事情もあり、工学部から教養部図学教室に移って後も、工学部で引き続き研究させていただくことができた。図学教室は、後に、兼担講座として工学研究科の教育・研究の担い手として制度

的にも保証された。長期在外研究員としてカールスルーエ大学（ドイツ）で過ごした折、原子力研究所で二相流質量流量計について共同研究した。この経験は、帰国後まもなく委託を受けて始めた海洋石油開発用二相流ポンプや流量計に関する研究開発に大いに役立った。

私が本学で研究を始めた当時は、60年安保反対闘争を経て間もない頃であり、産学・軍学協同研究にことのほか拒否的で、研究テーマも純粋に個々人の学問的知識欲からのものが多く、特許のような具体的成果を目指しての研究は少なかったように思う。それでいて、豊富な知識と研究実績、また、多分野に及び豊富な人材によって、時代の要請にその都度即応できてきたのだと思う。しかし、昨今、社会的要請という外的要因の強まり、市場原理主義の横行により納得いくまでの試行錯誤が困難という状況が生じがちで、若い研究者にとっては恵まれた状況であるとはばかりは言えないように思う。研究には、不動の心によるライフワークとしての深みが必要であり、多様で自主的な研究が尊重され、維持されてこそ、研究機関としての厚みが増すのだと思う。名古屋大学にはその基盤がある。

この10数年、教養部改革が軌道に乗り図学教室は解消して、情報文化学部、人間情報学研究科、情報科学研究科と組織が目まぐるしく変った。また、この3年間は教養教育院兼任教員として主に情報教育のあり方や内容の議論に参画させてもらった。教養部当時のように専任教官のみに教育が委ねられるのではなく、各専門分野の最前線で活躍している教員が全学から集まり、基礎教育や教養教育の内容、あり方を議論し、担当する制度に変わったことは大変素晴らしい。制度的にも、内容的にも、未だ改善余地は大いにあるが、学力の高進を図るとともに魅せられる教育も大学発展の一大要因である。今後の名古屋大学の発展を願ってやまない。

## 社会貢献・産学官連携・知的財産創出 さらに前進を

渡辺久士 (エコトピア科学研究機構)



1965年名古屋大学工学部電子工学科を卒業し、企業で35年間就業後退職し、再び名古屋大学に戻ったのが2000年でした。以来5年間、先端技術共同研究センターに所属し、大学の研究成果を知的財産として、保護、活用することの重要性の啓発やそのための方策の確立に尽力してきました。教職員の皆様のご理解とご協力に感謝します。

本学には、ノーベル賞を受賞され、特許出願実績においても日本の大学教授の中で上位におられた野依良治特別教授や青色発光ダイオードという世界的な大発明をされた赤崎勇特別教授がおられましたので、知的財産に関する啓発は大変やりやすかったと言えます。

本学における、知的財産啓発活動は、特許出願経験のある教授にアポイントを取り、研究室を訪問するというところからはじめました。最初は、勇気がいりましたが、殆どの教授は好意的に対応してくださいました。最初に訪問した教授から、本学で知的財産創出を盛んにするためには、知的財産を個人評価の対象にする必要があるというアドバイスをもらいました。また、別の教授から、特許を持っていても何のメリットもないと思っていたが、ある研究コンソーシアムの応募要件の中に特許出願実績という項目があった。それ以後、特許のよさを実感したという感想を聞き、本当にうれしかったことを思い出します。

その後、工学研究科長の指示で工学研究科中部 TLO 支援委員会が発足し、この委員会を軸に工学研究科で「特許辻説法」をしたり、工学研究科、医学系研究科、理学研究科、生命農学研究科などでは教授会やセミナーなどで知的財産の啓発活動を展開しました。これらの研究科の研究科長は全員知的財産の重要性をよく理解してください、積極的に教授会などで知的財産の啓発のチャンスを与えてくださいました。本当にラッキーだったと思います。

感謝にたえません。

このような知的財産の啓発活動で私の本学での5年は無事過ぎるのかなと思っていましたが、この予想は見事に外れました。文部科学省が知的財産本部整備事業を発表したからです。本学が不採択になるようなことはあってはならないと必死の思いで取り組みました。幸い、当時の産学官連携担当副総長や同総長補佐のリーダーシップにより採択され知的財産部が創設されました。創設後も新たな産学官連携担当副総長の方針の下で知的財産部体制の充実に邁進してきました。知的財産部メンバーもよくやってくれました。私の業務量は格段に増えました。でも定年です。後は皆様によろしくお願ひしたいと思います。

5年の経験から大学のあり方を述べたいと思います。大学の使命は、研究、教育、社会貢献・産学官連携だと思えます。研究は知の創造であり、教育は知の伝承であり、社会貢献・産学官連携は知の活用です。社会貢献・産学官連携は卓越した研究成果と優れた人材を基礎に実現すると思えます。今後、一層社会貢献・産学官連携は重要になると思えます。

工学部4年生に「特許法」を教えてきました。今年度の最後の授業終了に際し提出させた学生の自由意見のうち、感銘を受けた1文をご紹介します、お別れとしたいと思います。

「特許というものが少し身近になった。いろいろややこしい規程があって面倒くさそうだが、それだけ発明が堅固に保護されているのだ。知らない国で一日前に公開されたとしても、新規性がなくなるのだから、発明家も閉じこもってはいられない。世界を見渡していなくてはならないのだ。世界中の人が使うものでも発明するのは一回でよい。つまり、一人のアイデアが世界の財産になるのだなあ。」

## 多くの人との出会いに恵まれた35年間

北川 勝 弘 (農学国際教育協力研究センター)



私は1970年から35年間、名古屋大学にお世話になりました。この間の研究生生活や交友関係を振り返ると、実に多くの人との出会いに恵まれた35年間だったことに、今あらためて思い至り、深い感謝の念がわいてきます。

名古屋大学に赴任してから29年を過ごした農学部林学科森林利用学研究室(後に、資源生物環境学科森林資源利用学研究室)は、私にとって精神的な故郷ともいべき存在でした。研究室の先輩の先生方は、私の遅々とした研究上の歩みにおそらく危惧の念を抱かれていたでしょうが、じっと温かく私を見守り続けてくださいました。それは、生来のんびり屋の私にとって、過度にストレスを溜めずマイペースで研究生生活を続けてこられたという点で、実にありがたいことでした。このように人間味溢れた研究環境は、国立大学法人化された昨今の大学では、段々得難くなっていくのではないかと懸念されます。

私は名大に赴任して間もない頃から大型計算機センターをよく利用し、林道網配置計画に関する研究のプログラム開発に取り組みましたが、思うようには仕事はかどらず、研究面では挫折に次ぐ挫折の連続でした。1980年代の半ば頃になって研究室に若い新任技官が配属され、先輩の先生方のご配慮で、私の研究の相棒としてプログラム・システム構築を一緒に手がけてくれることになりました。そのお陰で、時には彼と激論を交しながら最適プログラム・システムの開発に熱中するという、後から思い返せば“夢のように幸せな”時期を過ごせました。この時期の取り組みが、約十年後に学会賞を頂戴した研究業績につながりました。研究室の先輩の先生方のご配慮には、今でも深く感謝しています。

話しは変わりますが、ちょうどその頃、私は名大職員組合からの要請を受けて、「名古屋大学平和憲章」制定(1987年2月5日)に向けて準備活動を開始したばかりの、全学的な実行委員会に加わりました。名大で行われる科学研究が戦争に利用されることに反対するという、「名大平和憲章」で謳われている平和主義の精神は、日本国憲法第9条の精神にも通ずる崇高なものです。この「憲章」制定実行委員会には、教職員だけでなく学生や大学院生も参加し、毎回熱心な論議が重ねられました。私は、名大の知性がまさにここに見事に結晶していると、強い感銘を覚えたものです。

そして、私は今から6年前の1999年4月に、設立されたばかりの農学国際教育協力研究センターへ移りました。国際協力機構(JICA)とタイアップした「ナミビア大学農学部強化支援計画」や「AICAD(アフリカ人造り拠点)プロジェクト」を担当しました。これらのプロジェクトを通じて、私は知性溢れるアフリカ人たちと出会い、私たちに求められる基本的な立場は、「援助」よりも「協力」なのだということを学びました。また、国際協力活動に携わる人々にほぼ共通して見受けられる“献身”の精神に、GIS(地理情報システム)研修コースをはじめ、いろいろな場面で幾度も出会い、感動させられました。

多くの人と出会い、温情や知的刺激を受け、人の和に恵まれたこと。私が名古屋大学で過ごした35年間は、このように総括できます。名古屋大学で出会い、お世話になった多くの皆さんに心から感謝いたします。願わくば、名古屋大学が今後とも、若い研究者がのびのびと生き甲斐をもって世に羽ばたいていけるように、温もりのある研究室環境を保全しつつ一層発展していかれんことを期待しています。



# イベントカレンダー

開催月日

イベント・概要

### 3.23～7.31 第8回名古屋大学博物館特別展



テーマ：時を測る - 地球誕生から中世まで -  
 場所：博物館  
 開館時間：10時～16時  
 休館日：月・火曜日 ただし祝休日は開館  
 入場料：無料  
 連絡先：博物館事務室 052 - 789 - 5767

### 4.4～4.27 附属図書館2005年春季特別展



テーマ：地域環境史を考える - 所蔵資料とエコ（環境共生）コレクション・データベースでみる自然・災害・社会 -  
 場所：中央図書館展示室  
 時間：10時～17時  
 入場料：無料  
 連絡先：附属図書館情報管理課庶務掛 052 - 789 - 3667

### 4.9 附属図書館2005年春季特別展講演会

場所：中央図書館多目的室  
 時間：13時～16時  
 講師：溝口常俊名古屋大学大学院環境学研究科教授、伊藤安男花園大学名誉教授、大浦由美名古屋大学大学院生命農学研究科助手  
 連絡先：附属図書館情報管理課庶務掛 052 - 789 - 3667

### 4.14 第38回名古屋大学博物館特別講演会

場所：博物館講義室  
 時間：15時～  
 講師：小田寛貴年代測定総合研究センター助手  
 演題：歴史時代資料の炭素14年代測定  
 連絡先：博物館事務室 052 - 789 - 5767

開催月日

イ ベ ン ト ・ 概 要

## 4 .16 附属図書館2005年春季特別展資料講座

場 所：中央図書館多目的室  
 時 間：13時～15時  
 内 容：特別展担当教員による展示資料とデータベースの解説  
 連 絡 先：附属図書館情報管理課庶務掛 052 - 789 - 3667

## 5 .12 第39回名古屋大学博物館特別講演会

場 所：博物館講義室  
 時 間：15時～  
 講 師：山本直人文学研究科教授  
 演 題：弥生時代はいつ始まったのか  
 連 絡 先：博物館事務室 052 - 789 - 5767

## 5 .23～5 .27 SciCADE05 (サイケディー05)

場 所：名古屋国際会議場  
 主 催：大学院情報科学研究科計算機数理科学専攻  
 共 催：名古屋大学21世紀COEプログラム「計算科学フロンティア」、日本応用数理学会、日本数学会  
<http://math.human.nagoya-u.ac.jp/scicade05/>  
 連 絡 先：三井斌友情報科学研究科教授 052 - 789 - 3075

## 6 .5 第40回名古屋大学博物館特別講演会

場 所：博物館講義室  
 時 間：13時～  
 講 師：赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）  
 演 題：邪馬台国時代の東海の風景  
 \*講演後、ギャラリートークもあります。  
 連 絡 先：博物館事務室 052 - 789 - 5767

## 本学関係の新聞記事掲載一覧（17年2月分）

	記事	月日	新聞等名
1	備える：その31「予知と津波」 東海地震の発生予知 安藤雅孝・環境学研究科教授の研究紹介	2 .1(火)	中日(朝刊)
2	家族への症状説明 患者の同意必要：中尾昭公・医学系研究科教授 コメント「大学病院クラスではすでに定着」	2 .1(火)	中日(朝刊)
3	本学、名城大学、鳥津製作所のグループが中東の塩湖「死海」に生息する原始的な藍藻の遺伝子を使って耐塩性の植物を開発	2 .1(火)	中日(朝刊)
4	第三期中央教育審議会新委員28人に理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授、長浜バイオ大教授・郷通子・本学名誉教授ら	2 .1(火)	日経(朝刊) 他5社
5	大杉小学校に本学のラオスからの留学生4人が訪問 生活の様子や踊りを紹介	2 .1(火)	中日(朝刊)
6	スマトラ沖地震の被害調査を目的とした学術調査団を派遣へ 安藤雅孝・環境学研究科教授を団長に 田中重好・同教授、木股文昭・同助教授ら 5日から13日まで	2 .2(水) 2 .5(土)	中日(朝刊) 朝日(朝刊) 読売 毎日(朝刊)
7	本学と名古屋工業大学、豊橋技術科学大学の3大学が新年度から低コストの耐震補強技術の開発を柱とする連携事業に取り組む	2 .2(水)	中日(朝刊)
8	進化する日本力：研究資金は「こと」に投資 浅井滋生・工学研究科教授は21世紀 COE プログラム「自然に学ぶ材料プロセスの創成」の活動にあたり、宣言	2 .2(水)	日刊工業
9	高松宮妃癌研究基金2004年度研究助成金に高橋雅英・医学系研究科教授、中尾昭公・同教授、浜島信之・同教授ら11人決定	2 .2(水)	日刊工業
10	第31回資源とエネルギーを大切に する県民大会5日に開催 柳下正治・環境学研究科教授講演	2 .2(水)	中日(朝刊)
11	法学部公開講座「現代の企業法務」7日に鈴木将文・法学研究科教授、10日に浜田道代・法学研究科教授	2 .2(水)	朝日(朝刊)
12	近況心境：アート創作 心理学で切る 岡田猛・教育発達科学研究科助教授	2 .2(水)	朝日(夕刊)
13	第2回キャンパスベンチャーグランプリ CHUBU (CVGC) の入賞者決定 実行委員会副委員長に平野真一総長	2 .2(水) 2 .3(木)	日刊工業

	記事	月日	新聞等名
14	大学の研究成果の情報発信不十分 福井康雄・理学研究科教授調査	2 .3(木) 2 .7(月)	中日(朝刊) 日経(朝刊)
15	医学部教授会で次期医学系研究科長・医学部長に濱口道成教授を選出	2 .3(木)	中日(朝刊) 他3社
16	医学部附属病院予防医療部が風疹などのワクチンの接種始める	2 .3(木)	中日(朝刊)
17	「メンタルヘルスフォーラム in 愛知」開催 尾崎紀夫・医学系研究科教授講演	2 .3(木)	中日(朝刊)
18	国公立大二次試験出願状況 本学は昨年より500人減	2 .3(木)	読売
19	大学文書資料室と男女共同参画室 移転拡充 移設披露式開催	2 .4(金)	中日(朝刊)
20	農水省「スギ花粉症緩和米」の開発に成功：前田英三・本学名誉教授 コメント「慎重に安全性を検証する必要ある」	2 .4(金)	読売
21	新年度年間授業料を1万5千円値上げすると発表	2 .4(金)	中日(朝刊)
22	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 今度は横浜から学ぶ番	2 .4(金)	朝日(夕刊)
23	ニッポン見聞録：コーチャル・リトウさん・本学大学院生 桜と梅に「ほっ」	2 .4(金)	朝日(夕刊)
24	「愛知の教育を考える懇談会」(座長・松尾稔・本学名誉教授)最終報告を神田真秋知事に提出	2 .5(土)	毎日(朝刊) 朝日(朝刊)
25	未来の主役へ：平野真一総長 夢への悩み大切に	2 .6(日)	中日(朝刊)
26	原水爆禁止日本協議会(代表幹事・沢田昭二・本学名誉教授)全国理事会開催 原水爆禁止日本国民会議や連合に共同行動提案へ	2 .7(月)	朝日(朝刊)
27	来年4月に保育所設置へ	2 .8(火) 2 .9(水)	中日(朝刊) 他3社
28	名大サロンの主役：東村博子・生命農学研究科助教授 女性の力 良き社会へ	2 .8(火)	中日(朝刊)
29	アフガニスタン・パーミヤン遺跡の科学的な年代測定の成果について、宮治昭・文学研究科教授が報告	2 .8(火)	中日(朝刊)
30	街道を行く：豊田講堂 緑の丘の上に調和 学究的雰囲気	2 .8(火)	中日(朝刊)
31	産学連携の強化目的に法人会員を中心とし「名古屋大学協会」設立へ	2 .8(火) 2 .10(木)	日経(朝刊) 日刊工業

	記事	月日	新聞等名
32	大学発ベンチャーの挑戦：ユビグラフ 河口信夫・情報連携基盤センター助教授のユビキタス基盤ソフトウェアの研究成果を活用するために設立された本学発ベンチャー企業	2.10(木)	日刊工業
33	老年学：井口昭久・医学系研究科教授 サンタ無い物ねだり	2.10(木)	朝日(朝刊)
34	山田鋭夫・経済学研究科教授の最終講義に200人	2.11(金)	朝日(朝刊)
35	優秀な学生を確保するため来年度から奨学金制度を創設	2.11(金)	読売
36	東海地方1月の地震：林能成・災害対策室助手	2.11(金)	読売
37	教職員や学生の代表らで話し合っ て決める予算の特別枠を来年度から新設	2.12(土)	読売
38	阪神・淡路大震災10年シンポジウム パネルディスカッションに安藤雅孝・環境学研究科教授参加	2.12(土)	サンケイ
39	2005年春闘労使インタビュー 日本経団連副会長・柴田昌治・全学同窓会副会長 賃上げ、個別企業判断	2.12(土)	毎日(朝刊)
40	「庄内川とすべての川の源流を考えるシンポジウム」 3月12日開催 服部重昭・生命農学研究科教授がコーディネーター	2.13(日)	毎日(朝刊)
41	池内了・理学研究科教授著「考えてみれば不思議なこと」書評	2.13(日)	朝日(朝刊)
42	「日中友好春節の会」開催 学友会の王暁偉さん・本学留学生「大学を超えて市内全体で留学生が協力し合えるようにしたい」	2.15(火)	中日(朝刊)
43	文学研究科公開シンポジウム「公と私の日本近代」3月5日開催	2.15(火)	中日(朝刊)
44	高等研究院セミナー22日開催 岡田猛・教育発達科学研究科助教授、関一彦・物質科学国際研究センター教授講演	2.15(火)	中日(朝刊)
45	佐藤安信・国際開発研究科教授、中西久枝・同教授、児玉克哉著「はじめて出会う平和学」書評	2.16(水)	朝日(夕刊)
46	スマトラ沖地震津波 現地調査報告会 田中重好・環境学研究科教授、木股文昭同助教授ら	2.17(木)	中日(朝刊) 読売
47	生物機能開発利用研究センター協議会は山木昭平センター長の任期満了に伴い、後任に小林迪弘教授を選出 農学国際教育協力研究センター協議会は竹谷裕之センター長の再任を決定 留学生センター協議会は末松良一センター長の任期満了に伴い、後任に江崎光男教授を選出	2.17(木)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
48	「名古屋発『グローバル時代の大学交流』～“人づくり”の現場から～」3月11日野依記念学術交流館で開催	2.19(土) 2.22(火)	毎日(朝刊)
49	マンモス研究「進化」小澤智生・環境学研究科教授は脳や皮膚などの組織から取り出したDNAの解析を2月下旬に開始	2.19(土)	中日(夕刊)
50	国際シンポジウム「自然再生と地域環境史」28日開催	2.22(火)	中日(朝刊)
51	平野眞一総長は教育記者会懇談会で「名古屋大学運営の基本姿勢」について触れ、医工連携の具体化など語る 豊橋技術科学大学の統合については再検討を 大学に対して特に功績のあった人に授与する称号「名古屋大学フェロー」の新設発表	2.23(水)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
52	「東海・東南海・南海地震を知る 蓄積される地震エネルギーと巨大地震への備え」講演会 鷲谷威・環境学研究科助教授は「地震意識し続けて」と語る	2.23(水)	毎日(朝刊)
53	愛知県西尾市は大規模地震の避難場所となる市内の全小中学校に井戸を掘削 鈴木康弘・環境学研究科教授コメント「西尾市の試みは期待できる」	2.23(水)	読売
54	青井啓悟・生命農学研究科助教授ら ナノ間隔に糖を並べる技術開発	2.23(水)	日経産業
55	本学初の脳死移植 肝臓を40代男性に移植 執刀医の木内哲也・医学系研究科教授ら「標準的な時間内に無事終了」	2.24(木) 2.25(金)	中日(朝刊) 他4社
56	脳の情報処理「最小単位」吉村由美子・環境医学研究所助手発見	2.24(木)	中日(朝刊)
57	情報文化学部教授会は八田武志学部長の任期満了に伴い、後任に佐野充教授を選出	2.24(木)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
58	医学の現場から：脳機能の画像診断 本学脳神経外科市民公開セミナーをもとに紹介	2.25(金)	中日(朝刊)
59	大学激動：大学院が抱える問題について、理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授に聞く 人材育成軽視が問題	2.25(金)	日経(朝刊)
60	ナノバイオ Expo 開催 馬場嘉信・工学研究科教授 ナノテクとバイオの融合領域が今後の日本に重要と強調	2.25(金)	日刊工業
61	国公立大学2次試験25日開始 本学9学部の受験者は4013人	2.25(金)	毎日(夕刊)

	記 事	月 日	新聞等名
62	中部地方の各大学、時代を反映したさまざまな設問を用意 本学法学部の小論文は政治学者の故丸山真男氏の『『現実』主義の陥穽』から出題	2 26(金)	中日(朝刊)
63	森とむすぶ:「混交林」に期待大きく 只木良也・本学名誉教授に聞く “環境維持代”払い不健全な林、間伐を	2 27(日)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
64	時のおもり：池内了・理学研究科教授 被災地とつながり続ける	2 28(月)	中日(朝刊)
65	NPO 法人バイオものづくり中部(理事長・加藤延夫・本学名誉教授)はアジアのバイオ・環境関連ベンチャーとの連携を強化	2 28(月)	日刊工業



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
( <http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/> ) でもご覧いただけます。



本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

総務企画部総務広報課広報掛

電話：052 ( 789 ) 2016

FAX：052 ( 789 ) 2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

最近、いろいろなところで絵はがきが注目されています。趣味としての絵はがきづくりがちょっとしたブームになっていますし、美術品や文化財として、あるいは歴史を語る史料として研究や鑑賞の対象にもなっています。

このたび大学文書資料室では、戦前の旧制第八高等学校（戦後の名大教養部、現情報文化学部）の絵はがきを入手しました。開校記念と行幸記念のものです。

開校記念絵はがきは8枚あり、現在では大変珍しいものです。図柄は、イラストの中に八高の施設や行事などの写真が入っています。下の絵はがきの1枚は、1908（明治41）年創立当初の仮校舎（県立一中旧校舎、現名古屋市東区外堀町）と、その翌年移転した新校舎（現名市大瑞穂キャンパス）の写真を並べたものです。もう一枚は、製図や実験の授業風景です。いずれも、発行は第八高等学校校友会、図案は八高絵画研究会となっています。

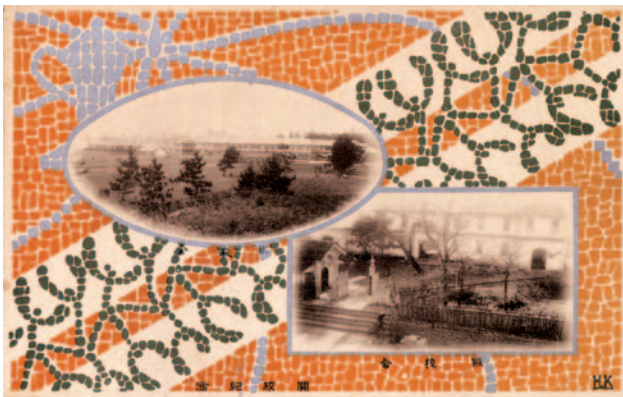
行幸記念は3枚で、いずれも写真のみの構成です。これは1927（昭和2）年、即位したばかりの昭和天皇が八高を訪れたことを記念したものです。

八高では、さまざまな行事のたびに、こうした絵はがきを発行していたようです。その他、名古屋市博物館には、所蔵されている八高関係資料（八高会寄贈）の中に絵はがきがありますし、八高関係の記念誌にも写真が載っています。

資料室では、こうした絵はがきの展示会ができればと考えています。絵はがきをはじめ、八高関係資料の情報があれば、どんな些細なことでもぜひお寄せください。



裏面（開校記念）



新校舎（上）と仮校舎（下）（開校記念）



行幸記念



化学実験（上）製図（中）物理実験（下）  
（開校記念）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、  
大学文書資料室（052-789-2046、[nua\\_office@cc.nagoya-u.ac.jp](mailto:nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)）へご連絡下さい。